

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第15輯

主要地方道岸和田牛滝山貝塚線建設に伴う

# 三田遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1987

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第15輯

主要地方道岸和田牛滝山貝塚線建設に伴う

み た  
三 田 遺 跡

—— 発掘調査報告書 ——



1 9 8 7

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



(南上空から)



(北西上空から)



A地区3号墳全景（東から）



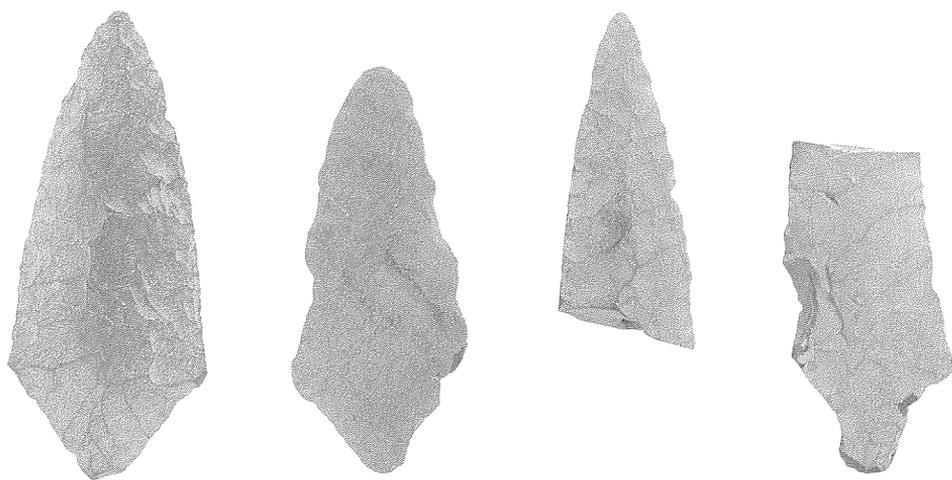
B-3区全景（北から）



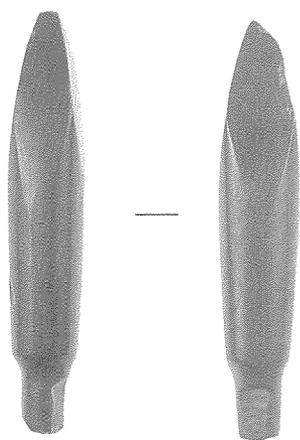
2区掘立柱建物群全景（南から）



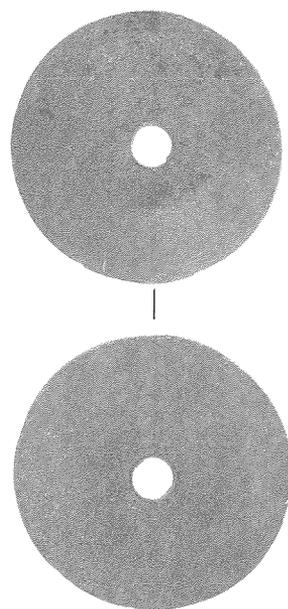
C2015-0B 全景（北から）



有舌尖頭器



鏃形石製品



紡錘車

# 序 文

本遺跡は岸和田市三田町に所在しており、大阪府教育委員会が昭和58年度に実施した府道磯之上・山直線予定地内の分布調査によって新たに発見された遺跡であります。

分布調査の結果から、鎌倉・室町時代を中心とする集落遺跡であると考えられていましたが、発掘調査の結果、先土器時代から鎌倉・室町時代にかけての複合集落遺跡であることが明らかとなりました。

昭和59年から開始された、大阪府教育委員会及び当協会の調査によって、古墳時代前期の土壙墓群、古墳時代後期の小古墳と竪穴住居及び掘立柱建物から構成される集落遺跡等が発見されています。また奈良時代から平安時代にかけてと、鎌倉時代の集落跡がそれぞれ確認されました。

これらの調査成果は当初の予測をはるかに越えるものであったと同時に、「牛滝谷」の開発史を物語る貴重な歴史遺産を、私達の眼前に現実のものとして示してくれます。

今回の調査の契機となった府道磯之上・山直線は、近畿自動車道和歌山線と大阪湾岸線を結ぶ主要道路として計画されました。また岸和田市内を縦貫する、関西国際空港のアクセスとしての重要な役割を担っています。沿岸には大阪府が提唱しているコスモポリス計画（先端産業工業団地）等の予定地も含んでおります。このように、今後新たな地域開発が予定されています。

本調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府土木部、大阪府岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会をはじめとする地元各位の多大なるご協力、ご理解に対して深謝の意を表します。

今後も当協会に対してご支援を賜りますようお願い申し上げます。

昭和62年3月

(財)大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄



# 例 言

1. 本書は主要地方道岸和田牛滝山貝塚線（以下、通称に従い府道磯之上山直線と呼称）建設に先立つ、岸和田市三田町に所在する三田（みた）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が行った。
3. 当協会が担当した調査は、第2次調査として1985年11月1日から1986年3月31日まで実施したA・B地区と、第3次調査として1986年7月1日から1987年2月28日まで行ったC地区が中心であった。
4. 本書においては、大阪府教育委員会が実施した第1次調査及び横断道路擁壁部の調査についても合わせて報告している。
5. 3次に亘って行われた、調査及び整理の担当者は以下の通りである。

第1次調査（北半部擁壁）	大阪府教育委員会文化財保護課	技師小山田宏一
第2次調査（A地区）	当協会調査課第5班	班長岩崎二郎、技師田中龍男、 服部みどり
〃（B地区）	当協会調査課第3班	班長渡辺昌宏、技師渋谷高秀、 田中一広
第3次調査（C地区）	当協会調査課第3班	技師小山田宏一、宮崎泰史、 田中一広
〃（中央部擁壁・水路）	当協会調査課第3班	技師小山田宏一、宮崎泰史
〃（D地区）	当協会調査課第3班	班長渡辺昌宏、技師森井貞雄、 虎間英喜
〃（横断道擁壁部分）	大阪府教育委員会文化財保護課	技師藤沢真依
6. 報告書作成及び出土遺物の整理作業は、発掘調査と並行して進められ、1987年3月31日で終了した。
7. 大阪府教育委員会が実施した第1次調査の整理作業は、C地区の整理作業と並行して行った。その成果は各地区の調査結果に含めて報告している。
8. 本書の作成作業並びに遺物整理作業、遺構・遺物の製図、トレースと本文の執筆は、各担当者が分担して行った。なお文責は各文末に記した。

9. 遺構写真については、各担当が撮影を行った。遺物写真の撮影から焼付までは、資料係長泉本知秀、高田充哲、小森和夫、小倉勝が担当した。
10. 本書の編集は、渡辺、小山田、宮崎が担当した。なお第Ⅷ章第2節、第3節については、調査担当者全員が討議した結果をふまえて、渡辺と小山田が分担してまとめた。
11. 本遺跡では、花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析等を実施した。その結果については、第Ⅷ章第1節に掲載した。また第Ⅱ章第2節で載せた三田遺跡周辺の地形分類図については、大阪府科学教育センター豊田兼典氏の提供を受けた。
12. A～D地区の調査においては、航空測量を実施した。航空写真及び20分の1、100分の1の平面実測図（遺構図・コンタ図）をそれぞれ作成している。
13. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会をはじめとして、大阪府岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、地元三田地区をはじめ関係各位の方々から格別の御配慮をいただいた。
14. 調査及び報告書作成においては、大阪府教育委員会文化財保護課及び当協会職員諸氏の他に以下の諸氏より御教授、御指導をいただいた。記して深く感謝の意を表したい。石部正志、石野博信、泉森皎、井石好裕、神谷正弘、久世仁士、近藤利由、玉谷 哲、千賀 久、豊田兼典、土井孝之、灰掛 薫、藤田正篤、森 茂、山本高照。（50音順）
15. 本調査にあたっては、写真、実測図、及び当協会の「発掘調査規程」に準じた各種の台帳類を作成した。またカラースライドも多数作成している。広く各方面で利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 本遺跡の調査では、国土座標第VI系を基準にして、当協会が独自に設定した地区割方法（当協会作成の「発掘調査規程」に基く）を使用している。その詳細については、本書第III章第2節を参照されたい。なお各遺構平面図には、国土座標第VI系の座標値をX軸とY軸についてメートル単位で表記した。
2. 本書に掲載した各遺構平面図の方位は、全て国土座標の北をNとして示した。なお三田遺跡周辺での磁北は、座標北より西へ6度20分の方角にあたる。
3. 本書で用いたレベル高は、全て東京湾標準潮位（T.P.値）である。
4. 第1次調査の遺構番号については、調査時の番号をそのまま使用した。
5. 第2・第3次調査の遺構番号は、基本的に調査時のものを使用したために、各調査区ごとに完結している。そこで同一番号による混乱を避けるために、頭に各調査区のアルファベット（A～C）を付した。各調査区での遺構番号は、通し番号を原則としたが、一部欠番を含む。但し掘立柱建物については、各調査区通して時代順（古墳時代1001～、奈良・平安時代2001～、鎌倉・室町時代3001～）に番号を北側から付けた。
6. 遺構の種類は、当協会作成の「発掘調査規程」に準じ、以下の略号で表現した。  
建物 OB、竪穴住居 OD、柵・塀 OF、土壇 OO（土坑）、柱穴 OP、河川 OR、溝 OS、井戸 OW、その他・不明 OX。
7. 各遺構の名称は、凡例5、6に準拠して以下のように表わした。例：B473-ODはB地区の竪穴住居を示し、B地区全体で473番目の遺構にあたることを表現している。
8. 本書においては、遺構実測図中の遺構番号を出来るだけ記入するように努めたが、全てを図示できなかった。
9. 本書で使用した遺物番号は、各調査区ごとに通し番号を付け、番号の前に各調査区のアルファベット（A～C）を記入した。例：A1～、B1～、C1～。  
また挿図の遺物番号と写真図版の遺物番号は、同一のものを使用している。
10. 遺物実測図の縮尺は、土器が4分の1・8分の1、石器は3分の2・2分の1、金属製品は原寸・3分の2を基本とした。
11. 遺構実測図の縮尺は、竪穴住居、掘立柱建物についてはできるだけ60分の1に統一したが、基本的にはそれぞれの遺構の状態に合わせて設定した。

12. 本書においては、古墳時代を前期と後期の2期に区分した。古墳時代前期は5世紀前葉までとし、古墳時代後期は5世紀中葉から7世紀初頭までとした。
13. 古墳時代の須恵器については、中村浩氏の編年(『陶邑I』大阪府教育委員会 1976年)を用いた。奈良時代の土器については、適時平城宮跡において奈良国立文化財研究所が作成した編年を用いた。
14. B地区の竪穴住居の場合、主軸方向についてはカマドの向きを基準とした。但しカマド等が不明な竪穴住居については、東辺の方向を主軸方向とした。
15. B地区包含層出土遺物に関しては、2区についてのみ層ごとの器種別破片数を掲載(第4表)した。
16. 土坑、溝については本書紙数の関係から説明を一部省略しているものもある。
17. 本書での土壌色と土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳 5版1976年』を基準として記載した。
18. 本書の作成作業にあたっては、担当者間で数回の編集会議を持って討論してきた。その中で、時期区分、用語、各実測図等を含めた記載方法についても、出来るだけ統一することに努めた。しかし表現方法等において執筆者の考えを尊重し、部分的にあえて統一していないところもある。

# 本文目次

序文	
例言	
凡例	
第I章 経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第1項 第1次調査	2
第2項 A地区(第2次調査)	4
第3項 B地区(第2次調査)	4
第4項 C地区(第3次調査)	5
第5項 D地区(第3次調査)	6
第II章 三田遺跡と周辺の環境	7
第1節 位置と地理的環境	7
第2節 歴史的環境	11
第III章 調査方法	35
第1節 第1次調査	35
第2節 第2・3次調査	35
第1項 A地区	36
第2項 B地区	37
第3項 C地区	39
第4項 D地区	41
第IV章 層序	42
第V章 A地区の調査	45
第1節 層序と概要	45
第2節 縄紋時代	58
第3節 古墳時代	62
第1項 遺構と遺物	62
第2項 遺構外出土遺物	78
第4節 鎌倉・室町時代	82
第1項 遺構と遺物	82
第2項 遺構外出土遺物	87
第5節 水路部・道路拡幅部の調査	89
第1項 A-2b区	89
第2項 A-3b区	89
第3項 A-5区	90
第6節 小結	91
第VI章 B地区の調査	93
第1節 層序と概要	93
第2節 先土器時代から縄紋時代	98
第3節 古墳時代	101
第1項 遺構と遺物	101
第2項 遺構外出土遺物	203
第4節 平安時代～鎌倉時代	211
第1項 遺構と遺物	211
第2項 遺構外出土遺物	219
第5節 江戸時代以降	221
第6節 小結	224
第VII章 C地区の調査	231
第1節 層序と概要	231
第2節 先土器時代から縄紋時代	231
第3節 古墳時代	235
第1項 古墳時代前期の遺構と遺物	235
第2項 古墳時代後期の遺構と遺物	244
第4節 奈良時代～平安時代	247
第5節 鎌倉時代～室町時代	317
第1項 遺構と遺物	317
第2項 包含層	323
第6節 江戸時代以降	323
第7節 小結	325
第VIII章 考察	347
第1節 遺物・遺物の分析と検討	347
第1項 三田遺跡におけるプラント・オパール 分析	347
第2項 三田遺跡花粉・珪藻分析報告	350
第3項 三田遺跡における竪穴住居とカマド構造 の変遷	368
第4項 古墳時代土器の器種構成とその比率	374
第5項 須恵器「ヘラ記号」について	384
第2節 三田遺跡の変遷	386
第1項 先土器時代～縄紋時代	386
第2項 古墳時代前期	386
第3項 古墳時代後期	386
第4項 奈良時代～平安時代	387
第5項 鎌倉時代	388
第6項 江戸時代以降	388
第3節 調査成果と課題	388

# 挿 図 目 次

第1図	三田遺跡調査地位置図 (1/5,000) ……………	3	第32図	A83-OS 出土土器 (1/4) ……………	69
第2図	三田遺跡の位置図 (1/25,000) ……………	7	第33図	A85-OS 出土土器 (1/4) ……………	70
第3図	三田遺跡周辺の地形分類図 (1/20,000) ……	9	第34図	A98・99・100・101-OS 断面図 (1/60) ……	70
第4図	摩湯山古墳概略図 (梅原図を改変) (約1/600) ……………	16	第35図	A98-OS 出土土器 (1/4) ……………	71
第5図	摩湯山古墳前方部採取埴輪 (府教委保管など1/3) ……………	17	第36図	A101-OS 出土土器 (1/4) ……………	71
第6図	三田遺跡周辺遺跡群分布図 (約1/55,000) ……………	25~26	第37図	A120-OS 出土土器 (1/4) ……………	72
第7図	地区割の方法模式図……………	35	第38図	A121・123・124-OS 出土土器 (1/4) ……	73
第8図	A地区調査区配置図 (1/2,500) ……………	36	第39図	A147-OS 出土土器 (1/4) ……………	75
第9図	B地区地区割図 (1/1,500) ……………	37	第40図	A168-OS 出土土器 (1/4) ……………	75
第10図	三田遺跡縦断 (東壁) 土層断面図 (垂直1/60・水平1/600) ……………	43~44	第41図	A194-OS 出土土器 (1/4) ……………	75
第11図	三田遺跡A地区割図 (1/2,500) ……………	46	第42図	A36・47-OO 断面 (1/60) ……………	76
第12図	A-2区平面図 (1/200) ……………	47~48	第43図	A47-OO 出土土器 (1/4) ……………	76
第13図	A-3区平面図 (1/200) ……………	49~50	第44図	A88-OO 出土土器 (1/4) ……………	76
第14図	A-3区北壁・中央部横断面図 (1/40) ……………	51~52	第45図	A91-OO 出土土器 (1/4) ……………	76
第15図	遺構全体図 (1/200) 及び畦1・畦2断面図 (1/40) ……………	53~54	第46図	A108-OO 出土土器 (1/4) ……………	77
第16図	A-4区北壁・西壁断面図 (1/80) ……	55~56	第47図	A177-OO 出土磨製石斧 (1/3) ……	77
第17図	各時代の遺物 (1/4) ……………	57	第48図	A189-OL 出土土器 (1/4) ……………	78
第18図	黄色粘土層出土土器 (2/3) ……………	59	第49図	鍬形石製品 (2/3) ……………	78
第19図	第III層出土土器(1) (2/3) ……………	60	第50図	古墳時代遺構外出土土器 (1/4) ……	79
第20図	第III層出土土器(2) (2/3) ……………	61	第51図	鎌倉~室町時代遺構外出土土器 (1/4) ……	88
第21図	縄紋土器 (1/4) ……………	61	第52図	A-2b区平面図 (1/100) ……………	89
第22図	1号墳平面・断面図 (1/200) ……………	62	第53図	A-3b区平面図 (1/80) ……………	89
第23図	1号墳(A22-OS)周溝出土土器(1/4) ……	63	第54図	B地区縦断 (1~3区西壁・4区東壁)及び 1区南壁土層断面図 (1/80) ……………	95~96
第24図	2号墳(A20-OU)平面・断面図 (1/200) ……………	63	第55図	B地区横断土層断面図 (1/80) ……………	97
第25図	2号墳(A20-OU)周溝出土土器(1/4) ……	64	第56図	B地区出土サヌカイト剥片 (2/3) ……	98
第26図	3号墳平面・断面図 (1/60) ……………	65	第57図	B地区古墳時代後期遺構全体図 (1/200) ……………	99~100
第27図	3号墳出土石製紡錘車 (2/3) ……	66	第58図	B406-OD(a)(b)、B1012-OB、B89・ 200・402-OD 平面・断面図 (1/60) ……	102
第28図	A21-OS 断面図 (1/60) ……………	66	第59図	B406-OD、B1012-OB、B89・200・402-OO 土層断面図 (1/60) ……………	103
第29図	A41・42・82・83・85-OS 断面図 (1/60) ……	67	第60図	B406-OD 出土土器 (1/4) ……………	104
第30図	A41-OS 出土土器 (1/4) ……………	68	第61図	B471・472-OD 平面・断面図 (1/60) ……	106
第31図	A42-OS 出土土器 (1/4) ……………	69	第62図	B471・472-OD 土層断面図 (1/60) ……	107
			第63図	B472-OD カマド平面・断面図 (1/20) ……………	108
			第64図	B472-OD カマド支脚写真 ……………	109

第65図	B472-OD出土土器 (1/4) ……………	109	第93図	B480-OD平面・断面図 (1/60) ……………	138
第66図	B473-OD平面・断面図 (1/60) ……………	110	第94図	B480-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	139
第67図	B473-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	111	第95図	B480-OD出土土器 (1/4) ……………	140
第68図	B474-OD、B484・629・632-OO 平面・断面図 (1/60) ……………	113	第96図	B480-OD出土砥石 (2/3) ……………	141
第69図	B474-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	114	第97図	B798-OD平面・断面図 (1/60) ……………	142
第70図	B473・474-OD出土土器 (1/4) ……………	114	第98図	B798-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	143
第71図	B475-OD出土土器 (1/4) ……………	115	第99図	B798-OD出土土器 (1/4) ……………	143
第72図	B475-OD平面・断面図 (1/60) ……………	116	第100図	B481-OD平面・断面図 (1/60) ……………	144
第73図	B478・844-OD平面・断面図 (1/60) ……………	118	第101図	B481-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	145
第74図	B478-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	119	第102図	B470-OD平面・断面図 (1/60) ……………	147
第75図	B478・844-OD出土土器 (1/4) ……………	120	第103図	B507-OD平面・断面図 (1/60) ……………	148
第76図	B800-OD平面・断面図 (1/60) ……………	121	第104図	B507-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	149
第77図	B800-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	122	第105図	B507・469-OD出土土器 (1/4) ……………	149
第78図	B799・800-OD土器出土状態 (1/20) ……………	123	第106図	B469-OD平面・断面図 (1/60) ……………	151
第79図	B800-OD出土土器 (1/4) ……………	124	第107図	B469-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	152
第80図	B799-OD平面・断面図 (1/60) ……………	125	第108図	B1001-OB平面・断面図 (1/60) ……………	154
第81図	B834-OP・B799-OD出土土器 (1/4) ……………	126	第109図	B1002-OB平面・断面図 (1/60) ……………	155
第82図	B762-OO・B801・802-OD平面・断面図 (1/60) ……………	128	第110図	B1003-OB平面・断面図 (1/60) ……………	156
第83図	B802-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	129	第111図	B1004-OB平面・断面図 (1/60) ……………	157
第84図	B801-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	130	第112図	B363~365-OF平面図 (1/60) ……………	158
第85図	B801-OD出土土器 (1/4) ……………	130	第113図	E02 LJ区土器出土状態 (1/20) ……………	159
第86図	B476-OD平面・断面図 (1/60) ……………	131	第114図	1区堀立柱建物柱穴出土土器 (1/4) ……………	159
第87図	B476-OD土器出土状態 (1/20) ……………	132	第115図	B1011-OB平面・断面図 (1/80) ……………	160
第88図	B476-OD出土土器(1) (1/4) ……………	133	第116図	B1013~1016-OB平面図 (1/60) ……………	161~162
第89図	B476-OD出土土器(2) (1/4) ……………	134	第117図	B1013~1016-OB柱穴断面図 (1/60) ……………	163
第90図	B479-OD平面・断面図 (1/60) ……………	135	第118図	2区土坑・溝土層断面図 (1/60) ……………	164
第91図	B479-ODカマド平面・断面図 (1/20) ……………	136	第119図	B1017-OB平面・断面図 (1/60) ……………	166
第92図	B479-OD・B840-OO出土土器 (1/4) ……………	136	第120図	B1019-OB平面・断面図 (1/60) ……………	167
			第121図	2、3区土坑・柱穴出土土器 (1/4) ……………	168
			第122図	B1025-OB平面・断面図 (1/60) ……………	169
			第123図	3区柱穴出土土器 (1/4) ……………	169

第124図	B61-OS平面図(1/20) ……………	170	第155図	B61-OS・B158-OO出土土器・石製品 (1/4) ……………	189
第125図	B213-OS土層断面図(1/30) ……………	170	第156図	B150・160・373-OO平面・断面図 (1/60) ……………	190
第126図	B213-OS出土土器(1/4) ……………	170	第157図	B372-OO平面・断面図(1/60) ……………	191
第127図	B213・214-OS平面・断面図 (1/20) ……………	171	第158図	B200-OO出土土器(1/4) ……………	192
第128図	B149-OS出土土器(1/4) ……………	172	第159図	B477-OO出土土器(1/4) ……………	192
第129図	B151-OS出土土器(1/4) ……………	172	第160図	B762-OO, B693・803-OS出土土器 (1/4) ……………	193
第130図	B152・153・150-OS出土土器 (1/4) ……………	173	第161図	B660-OO出土土器(1/4) ……………	194
第131図	B151・153-OS土器出土状態 (1/20) ……………	173	第162図	B158-OO出土石製品(1/4) ……………	195
第132図	B149~153-OS平面図(1/60) ……………	174	第163図	B371-OO出土土器(1/4) ……………	196
第133図	B149~153・159-OS土層断面図 (1/30) ……………	175	第164図	B189-OO出土土器(1/4) ……………	196
第134図	B159-OS, B45-OO平面図 (1/160) ……………	176	第165図	B93-OO出土土器(1/4) ……………	197
第135図	B10-OR平面図(1/135) ……………	176	第166図	B94-OO出土土器(1/4) ……………	197
第136図	B159-OS出土土器(1/4) ……………	177	第167図	B407-OO平面・断面図(1/40) ……………	198
第137図	B42-OS平面, 断面図(1/40) ……………	177	第168図	2区土坑・溝出土土器(1/4) ……………	199
第138図	B10-OR出土土器(1/4) ……………	177	第169図	B402-OO出土土器(1/4) ……………	200
第139図	B10-OR甕出土状態(1/30) ……………	177	第170図	B483-OO出土土器(1/4) ……………	200
第140図	B10-OR土層断面図(1/80) ……………	177	第171図	B811・839-OO出土土器・土製品 (1/4) ……………	201
第141図	2区落ち込み状遺構出土土器 (1/4) ……………	178	第172図	B495-OO出土土器(1/4) ……………	202
第142図	B91-OS出土土器(1/4) ……………	178	第173図	1・2区第6層出土土器 (1/4) ……………	204
第143図	B482-OS平面・断面図 (1/120・1/30) ……………	181	第174図	2区第5a層出土土器(1/4) ……………	205
第144図	B482-OS出土土器(1)(1/4) ……………	182	第175図	2区第5b層出土土器(1/4) ……………	206
第145図	B482-OS出土土器(2)(1/4) ……………	183	第176図	2区第4層出土土器・土製品(1/4) ……………	206
第146図	B482-OS出土土器(3)(1/4) ……………	184	第177図	1区柱穴・第6層出土土器 (1/4) ……………	207
第147図	B93~95-OO平面・断面図(1/90) ……………	185	第178図	B3003-OB平面・断面図(1/40) ……………	212
第148図	B160-OO出土土器(1/4) ……………	186	第179図	1区中世遺構全体図(1/120) ……………	213~214
第149図	B155・156-OO出土土器(1/4) ……………	186	第180図	B3004-OB平面・断面図(1/40) ……………	215
第150図	B44・45・155-OO平面・断面図 (1/40) ……………	186	第181図	B3005-OB平面・断面図(1/40) ……………	216
第151図	B373-OO, B372-OP出土土器 (1/4) ……………	187	第182図	3区小溝群平面図(1/160) ……………	217
第152図	B158-OO平面・断面図(1/20) ……………	187	第183図	1区「中世掘溝」出土土器(1/4) ……………	218
第153図	B371-OO提瓶出土状態(1/15) ……………	188	第184図	1区第3・4層出土土器(1/4) ……………	220
第154図	B189-OO平面・断面図(1/40) ……………	188	第185図	1区第4層出土銅鏡(2/3) ……………	220
			第186図	3区第4層出土銭貨(1/1) ……………	221
			第187図	1区近世小溝群平面・断面図 (1/160) ……………	222

第188図	1区「中世素掘溝」断面……………223	第225図	C2005-OB平面・断面図(1/80) ……256
第189図	3区近世小溝群平面図(1/160) ……223	第226図	C2005-OB出土土器(1/4) ……257
第190図	B地区古墳時代後期遺構変遷図 (1/750) ……225~226	第227図	C2006-OB出土土器(1/4) ……257
第191図	C地区出土土器(1)(2/3) ……232	第228図	C2006-OB平面図(1/80) ……257
第192図	C地区出土土器(2)(2/3) ……233	第229図	C2007-OB出土土器(1/4) ……258
第193図	C地区出土土器(3)(2/3) ……234	第230図	C2007-OB平面・断面図(1/80) ……259
第194図	C1830-OS断面図(1/40) ……235	第231図	C2007-OB出土土器(1/2) ……260
第195図	C1830-OS平面図(1/100) ……236	第232図	C2008-OB平面・断面図(1/80) ……261
第196図	C1830-OS出土土器(1/4) ……237	第233図	C2008-OB出土土器(1/4) ……262
第197図	C300-OS断面図(1/20) ……237	第234図	C2009-OB平面・断面図(1/80) ……263
第198図	土墳墓群埋土類型分布図(1/300) ……238	第235図	C2009-OB出土土器(1/4) ……264
第199図	C390-OO出土土器(1/4) ……239	第236図	C1852-OP平面・断面図(1/20) ……264
第200図	土墳墓I群(C328・C343・C385・C390-OO) 平面・断面(1/50) ……240	第237図	C2010-OB平面・断面図(1/80) ……265
第201図	SK0042平面・断面図(1/30) ……241	第238図	C2010-CB出土土器(1/4) ……266
第202図	SK0042出土土器(1/4) ……242	第239図	C2011-OB平面・断面図(1/80) ……266
第203図	SK0047出土埴輪(1/4) ……242	第240図	C2012-OB出土土器(1/4) ……267
第204図	C435-OO断面図(1/40) ……242	第241図	C2012~2015-OB配置図(1/400) ……267
第205図	C436-OO平面・断面図(1/40) ……243	第242図	C2012-OB平面・断面図(1/60) ……268
第206図	C436-OO出土土器(1/4) ……244	第243図	C2013-OB平面・断面図(1/80) ……269
第207図	C875-OS断面図(1/20) ……244	第244図	C2014-OB平面・断面図(1/80) ……270
第208図	C875-OS出土土器(1/4) ……244	第245図	C2015-OB断面図(1/80) ……270
第209図	C1171-OS断面図(1/20) ……245	第246図	C2015-OB平面・断面図 (1/80) ……271~272
第210図	C1372・C1373-OS断面図 (1/20) ……245	第247図	C1592-OP柱根(1/20) ……273
第211図	C1373-OS出土土器(1/4) ……245	第248図	C1577・C1579・C1583-OP断面図 (1/20) ……273
第212図	C1766-OS断面図(1/20) ……246	第249図	C1579-OP遺物出土状況(1/20) ……274
第213図	C437-OS出土土器(1/4) ……246	第250図	C1567-OP平面・断面図(1/20) ……274
第214図	C437-OS断面図(1/20) ……246	第251図	C2015-OB出土土器(1/4) ……274
第215図	C396-OS断面図(1/20) ……247	第252図	C1583-OP出土土器(1/4) ……276
第216図	遺構面直上出土土器(1/4) ……247	第253図	C1592-OP柱根(1/6) ……276
第217図	C2001-OB平面・断面図(1/60) ……248	第254図	C2016-OB平面・断面図(1/80) ……277
第218図	C2001-OB出土土器(1/4) ……249	第255図	C825-OP平面・断面図(1/20) ……278
第219図	C2002-OB平面・断面図(1/60) ……250	第256図	各柱穴出土土器(1/4) ……278
第220図	C2002-OB出土土器(1/4) ……250	第257図	C1425-OP出土土器(1/4) ……280
第221図	C2003-OB出土土器(1/4) ……251	第258図	C1556-OP出土土器(1/4) ……280
第222図	C2003-OB平面・断面図(1/60) ……252	第259図	C1603-OP出土土器(1/4) ……281
第223図	C2004-OB平面・断面図(1/60) ……254	第260図	C915-OO断面図(1/40) ……282
第224図	C2004~2011-OB配置図(1/200) ……255	第261図	C915-OO平面図(1/100) ……282
		第262図	C915-OO出土土器(1/4) ……283

第263図	C935-OO 平面図 (1/80) ……………	285	第299図	轍平面図 (1/120) ……………	319
第264図	C935-OO 出土土器 (1/4) ……………	286	第300図	鎌倉～室町時代小溝平面図(1) (1/150) ……………	320
第265図	C1016-OO 出土土器 (1/4) ……………	287	第301図	鎌倉～室町時代小溝平面図(2) (1/200) ……………	321
第266図	C1040-OO 断面図 (1/20) ……………	288	第302図	小溝出土土器 (1/4) ……………	322
第267図	C1040-OO 出土土器 (1/4) ……………	288	第303図	C 2・3 区の江戸時代以降の遺構平面図 (1/600) ……………	324
第268図	C1046-OO 出土土器 (1/4) ……………	289	第304図	C1234・C1236・C1336-OW 断面図 (1/40) ……………	324
第269図	C1046-OO 平面・断面図 (1/40) ……………	289	第305図	山直条里地割と建物の位置関係図 ……	329～330
第270図	C1565-OO 平面・断面図 (1/40) ……………	290	第306図	奈良・平安時代掘立柱建物変遷図 (1/1000) ……………	335～336
第271図	C1565-OO 出土土器 (1/4) ……………	291	第307図	C 地区調査区割図と地区別主要遺構 ……	338
第272図	C1636-OO 平面・断面図 (1/40) ……………	292	第308図	C 地区遺構図(1) (1/200) ……………	339～340
第273図	C1642-OO 平面・断面図 (1/40) ……………	293	第309図	C 地区遺構図(2) (1/200) ……………	341～342
第274図	C1642-OO 出土土器 (1/4) ……………	294	第310図	C 地区遺構図(3) (1/200) ……………	343～344
第275図	C1678-OO 平面・断面図 (1/40) ……………	295	第311図	C 地区遺構図(4) (1/200) ……………	345～346
第276図	C1678-OO 出土土器 (1/4) ……………	295	第312図	ガラスビーズ法によるプラント・オパール 定量分析概要 ……………	348
第277図	C892-OS 平面図 (1/100) ……………	296	第313図	定量分析法分析結果(1) ……………	349
第278図	C 892-OS 断面図 (1/20) ……………	297	第314図	定量分析法分析結果(2) ……………	349
第279図	C892-OS 出土土器 (1/4) ……………	297	第315図	採取地点土層断面図・試料番号 ……	359
第280図	C936・937-OS 平面図 (1/80) ……………	298	第316図	花粉分析処理フロー ……………	359
第281図	C936-OS 遺物出土状況・断面図 (1/20) ……………	299	第317図	A16 PT 地点花粉分析結果 ……………	360
第282図	C936-OS 出土土器 (1/4) ……………	299	第318図	A16 WW (A 5-OS) 地点花粉分析結果 ……………	360
第283図	C1637-OS 出土土器 (1/4) ……………	301	第319図	A21 BV 地点花粉分析結果 ……………	360
第284図	C1638-OS 断面図 (1/40) ……………	302	第320図	E02 BJ 地点花粉分析結果 ……………	361
第285図	C1637～1640-OS 平面図 (1/100) ……	303	第321図	E02 OK 地点花粉分析結果 ……………	361
第286図	C1638-OS 出土土器 (1/4) ……………	305	第322図	E07 AS 地点花粉分析結果 ……………	362
第287図	C1639-OS 出土土器 (1/4) ……………	307	第323図	E07 HU 地点花粉分析結果 ……………	362
第288図	C1641-OS 平面・断面図 (1/40) ……	307	第324図	各地点花粉組成と花粉分帯の対比 ……	362
第289図	C1641-OS 出土土器 (1/4) ……………	308	第325図	珪藻分析処理フロー ……………	363
第290図	C-2 区北半部小溝群断面図 (1/20) ……………	308	第326図	A16 PT 地点珪藻分析結果 ……………	363
第291図	C-2 区北半部小溝群平面図 (1/100) ……………	309～310	第327図	E02 BJ 地点珪藻分析結果 ……………	364
第292図	C-2 区北半部小溝群出土土器 (1/4) ……………	311	第328図	E02 OK 地点珪藻分析結果 ……………	364
第293図	SD-0177 平面・断面図 (1/20) ……	312	第329図	E07 AS 地点珪藻分析結果 ……………	364
第294図	SD-0177 出土土器 (1/4) ……………	314	第330図	カマドの構造による分類 ……………	370
第295図	3 区小溝平面図 (1/150) ……………	316	第331図	カマドの支脚による分類 ……………	371
第296図	C1679・1701-OS 出土土器 (1/4) ……	317			
第297図	C3001-OB 平面・断面図 (1/60) ……	317			
第298図	C1478-OO 平面・断面図 (1/40) ……	318			

第332図	カマド構造の変遷 (1/60) ……………	372	第337図	〃	(2) ……	380	
第333図	各遺構の器種別破片数グラフ(1) ……	376	第338図	〃	(3) ……	381	
第334図	〃	(2) ……	377	第339図	〃	(4) ……	382
第335図	〃	(3) ……	378	第340図	〃	(5) ……	383
第336図	各遺構の土師器・須恵器比率グラフ(1) ……	379	第341図	ヘラ記号分類図 ……		385	

## 表 目 次

第1表	三田遺跡調査地区一覧表 ……	2	第8表	検出された花粉化石の種類一覧 ……	365
第2表	岸和田市内遺跡群一覧 ……	27	第9表	検出された珪藻化石の種類一覧 ……	366
第3表	B-2区遺構出土土器・器種別破片数 ……	209	第10表	土層区分と花粉分帯の関係 ……	367
第4表	B-2区包含層出土土器・器種別破片数 ……	210	第11表	三田遺跡の古植生・堆積環境 ……	367
第5表	B地区古墳時代遺構時期別一覧 ……	227	第12表	各時期の形態別破片数 ……	378
第6表	C地区奈良・平安時代主要遺構時期別一覧 ……	334	第13表	各時期の土師器と須恵器破片数 ……	383
第7表	C地区掘立柱建物一覧 ……	337			

## 付 図 目 次

付図1	三田遺跡遺構全体図(1) (1/500)	付図3	〃 (3) (〃)
付図2	〃 (2) (〃)	付図4	三田遺跡遺構変遷図 (1/1000)

## 図 版 目 次

<b>巻頭図版1 航空写真</b> 上段：南上空から 下段：北西上空から	<b>図版4 A-3区航空写真(1) (上方が南東)</b>
<b>巻頭図版2 A・B地区古墳時代後期 遺構</b> 上段：A地区3号墳全景 (東から) 下段：B-3区全景 (北から)	<b>図版5 A-3区航空写真(2) (上方が南東)</b>
<b>巻頭図版3 C地区奈良～平安時代 掘立柱建物</b> 上段：2区掘立柱建物群全景 (南から) 下段：C2015-OB全景 (北から)	<b>図版6 A-3区航空写真(3) (上方が南東)</b>
<b>巻頭図版4 縄紋～古墳時代 石製品</b> 上段：有下尖頭器 下段左：鏃形石製品 下段右：紡錘車	<b>図版7 A-3区航空写真(4) (上方が南東)</b>
<b>図版1 周辺航空写真</b>	<b>図版8 A-4区航空写真 (上方が南東)</b>
<b>図版2 A-2区航空写真(1) (上方が南東)</b>	<b>図版9 A-2区古墳時代 遺構</b> 上段：調査区全景 (南から) 下段：調査区全景 (北から)
<b>図版3 A-2区航空写真(2) (上方が南東)</b>	<b>図版10 A-3区古墳時代 遺構</b> 上段：調査区全景 (南から) 下段：調査区全景 (北から)
	<b>図版11 A-4区古墳時代 遺構</b> 上段：調査区全景 (南から) 下段：調査区全景 (北から)

図版12 A-2区古墳時代 1号墳(1)

上段：第2次調査区全景(西から)

下段：第1次調査区全景(北から)

図版13 A-2区古墳時代後期 1号墳(2)

上段：周溝土器出土状態(蓋)

下段：周溝土器出土状態(短頸壺)

図版14 A-2区古墳時代後期 2号墳(1)

上段：第2次調査区全景(西から)

下段：第1次調査区全景(東から)

図版15 A-2区古墳時代後期 2号墳(2)

上段：周溝土器出土状態(須恵器)

下段：周溝土器出土状態(土師器)

図版16 A-3区古墳時代後期 3号墳

上段：周溝全景(南西から)

下段：周溝近景(南西から)

図版17 A-3区古墳時代 遺構(1)

上段：北半部遺構全景(南から)

下段：北半部遺構全景(北から)

図版18 A-3区古墳時代 遺構(2)

上段：南半部遺構全景(南から)

下段：南半部遺構全景(北から)

図版19 A地区 遺構

上段：A-3区 第V層の調査(北から)

下段左：A-2b区 全景(西から)

下段右：A-3b区 全景(東から)

図版20 A地区縄紋時代 石器

上段：第V層出土石器 下段：第III層出土石器

図版21 A地区縄紋時代 石器・土器

上段：第III層出土石器 下段左：A177-OO出土石斧

下段右：第III層出土土器

図版22 A地区古墳時代 土器・石製品

1号墳 2号墳 3号墳

図版23 A-3区古墳時代 土器

A80・98・147・168-OS

図版24 A-4区古墳時代後期 土器

A120-OO、A124-OS

図版25 A地区古墳時代後期 土器

上段：A-4区 第III層出土須恵器

下段：A-2区 2号墳周辺出土器台

図版26 A地区古墳時代・鎌倉～室町時代 石製品・土

器

上段：古墳時代鉄形石製品(第III層)

下段：鎌倉～室町時代瓦器・土師器(第III層)

図版27 B地区航空写真(北上空から)

図版28 B地区古墳時代後期 遺構(1)

上段：1区全景(北から) 下段：2区全景(南から)

図版29 B地区古墳時代後期 遺構(2)

上段：3区全景(南から) 下段：4区全景(北から)

図版30 B地区古墳時代後期 竪穴住居(1)

上段：B406-OD全景(南から)

下段：B406-OD全景(西から)

図版31 B地区古墳時代後期 竪穴住居(2)

上段左上：B406-ODカマド土層断面(南から)

上段右上：B406-ODカマド近景(東から)

上段左下：B507-ODカマド土層断面(西から)

上段右下：B507-ODカマド煙道近景(南から)

下段：B507-ODカマド全景(北から)

図版32 B地区古墳時代後期 竪穴住居(3)

上段：B470-OD全景(北から)

下段：B469-OD全景(東から)

図版33 B地区古墳時代後期 竪穴住居(4)

上段左上：B469-ODカマド近景(東から)

上段右上：B469-ODカマド近景(南から)

上段左下：B472-ODカマド近景(南から)

上段右下：B472-ODカマド支脚近景(西から)

下段：B471-OD全景(東から)

図版34 B地区古墳時代後期 竪穴住居(5)

上段：B472-OD全景(南から)

下段：B473-OD全景(西から)

図版35 B地区古墳時代後期 竪穴住居(6)

上段左上：B473-ODカマド近景(西から)

上段右上：B473-OD貯蔵穴近景(西から)

上段左下：B473-OD土層断面(西から)

上段右下：B474-ODカマド近景(西から)

下段：B474-OD全景(西から)

図版36 B地区古墳時代後期 竪穴住居(7)

上段：B475-OD全景(北から)

下段：B476-OD全景(東から)

図版37 B地区古墳時代後期 竪穴住居(8)

上段左上：B476-OD土器出土状態(南から)

上段右上：B476-OD 土器出土状態（北から）

上段左下：B478-OD カマド近景（西から）

上段右下：B844-OD 土器出土状態（東から）

下段：B477-OO、B478・844-OD 全景（南から）

**図版38 B地区古墳時代後期 竪穴住居(9)**

上段：B479-OD 西半部全景（東から） 下段左上：B479-OD 東半部全景（東から） 下段右上：B479-OD カマド近景（南から） 下段左下：B840-OO 近景（南から） 下段右下：B841-OO 近景（南から）

**図版39 B地区古墳時代後期 竪穴住居(10)**

上段：B480-OD 全景（南から）

下段左上：B480-OD ベッド状遺構近景（南から）

下段右上：B480-OD カマド近景（南から）

下段左下：B480-OD カマド近景（東から）

下段右下：B481-OD カマド近景（南から）

**図版40 B地区古墳時代後期 竪穴住居(11)**

上段：B481-OD 全景（南から）

下段：B798-OD 全景（南から）

**図版41 B地区古墳時代後期 竪穴住居(12)**

上段左上：B798-OD カマド近景（南から） 上段右上：B798-OD 全景（西から） 上段左下：B834-OO 近景（東から） 上段右下：B799-OD 土器出土状態（東から） 下段：B800-OD 全景（東から）

**図版42 B地区古墳時代後期 竪穴住居(13)**

上段左上：B800-OD カマド近景（西から）

上段右上：B800-OD 土器出土状態（東から）

上段左下：B801-OD カマド近景（西から）

上段右下：B802-OD カマド近景（南から）

下段：B801・B802-OD 全景（南から）

**図版43 B-1区古墳時代後期 掘立柱建物(1)**

上段：掘立柱建物群全景（南から）

下段：掘立柱建物群・溝近景（北東から）

**図版44 B-1区古墳時代後期 掘立柱建物(2)**

上段左：掘立柱建物群全景（上空から）

上段右：掘立柱建物群近景（南東から）

下段左上：掘立柱建物群全景（南から）

下段右上：掘立柱建物群全景（北から）

下段左下：掘立柱建物群近景（東から）

下段右下：掘立柱建物群近景（東から）

**図版45 B-2区古墳時代後期 掘立柱建物(3)**

上段：掘立柱建物群全景（西上空から）

下段：掘立柱建物群全景（北から）

**図版46 B地区古墳時代後期 掘立柱建物(4)**

上段：B1013~1016-OB 全景（南から）

下段：B1011-OB 全景（西から）

**図版47 B地区古墳時代後期 掘立柱建物(5)**

上段：B1018・1020-OB 全景（東から）

下段：B1017・1018・1025-OB 全景（南から）

**図版48 B地区古墳時代後期 掘立柱建物(6)**

上段：B1019-OB 全景（南から）

下段：B1021・1022-OB 全景（東から）

**図版49 B地区古墳時代後期 掘立柱建物(7)**

上段：B1021-OB 全景（北から） 下段左上：B436-OP 近景（西から） 下段右上：B514-OP 土器出土状態（東から） 下段左下：B590-OP 土層断面（東から） 下段右下：B533-OP 土層断面（東から）

**図版50 B-1区古墳時代後期 遺構(1)**

上段：北半部遺構全景（東から） 下段左上：B155-OO 土層断面（西より） 下段右上：B10-OR 土器出土状態 下段左下：B155-OO 土器出土状態 下段右下：B158-OO 土器出土状態

**図版51 B-1区古墳時代後期 遺構(2)**

上段左：南半部溝全景（東から） 上段右上：B149-OS 土層断面（北から） 上段右下：B149-OS 土器出土状態 下段左上：B151-OS 土器出土状態 下段右上：B151-OS 土層断面 下段左下：B153-OS 土器出土状態 下段右下：B151-OS 土器出土状態

**図版52 B-1区古墳時代後期 遺構(3)**

上段左：B213-OS 全景（南から） 上段右：B213-OS 土器出土状態 下段左上：E02LJ 土器出土状態 下段右上：B373-OO 土器出土状態 下段左下：E02KJ 土器出土状態 下段右下：B160-OS 土器出土状態

**図版53 B-2区古墳時代後期 遺構(1)**

上段左：北端部谷状落ち込み全景（南から） 上段右：B422-OO 全景（南から） 下段左：B407-OO 全景（北から） 下段右：B407-OO 土層断面（北から）

**図版54 B-2区古墳時代後期 遺構(2)**

上段：南東部遺構全景（北から） 下段左上：B200-OO 土層断面（東から） 下段右上：B200-OO 全景（東か

ら) 下段左下: B402-00 全景(北から) 下段右下:

B402-00 土器出土状態(北から)

**図版55 B-2・3区古墳時代後期 遺構**

上段左上: B73-00 土器出土状態(北から) 上段右

上: B85-0S 土層断面(南から) 上段左下: B420-

00 全景(北から) 上段右下: B420-00 土器出土状

態(東から) 下段左上: B811-00 全景(西から) 下

段右上: B839-00 全景(南から) 下段左下: B495-

00 全景(東から) 下段右下: B495-00 土器出土状

態(西から)

**図版56 B-3区古墳時代後期 遺構**

上段: B482-0S 全景(東から) 下段左上: B482-0S

土層断面(東から) 下段右上: B482-0S 土器出土状

態(北から) 下段左下: B482-0S 土器出土状態(東

から) 下段右下: B483-00 全景(東から)

**図版57 B-1区鎌倉時代 遺構(1)**

上段: 1区全景(北から)

下段: B3003-0B 全景(南から)

**図版58 B-1・4区鎌倉時代 遺構(2)**

上段左: 1区「中世掘溝」全景(南から) 上段右:

1区「中世掘溝」全景(東から) 下段左: 4区柱穴

群全景(東より) 下段右上: 1区 B144-00 全景(東

から) 下段右下: 4区 B460-0P 根石近景(北から)

**図版59 B-1・3区鎌倉〜江戸時代 小溝**

上段左: 1区江戸時代小溝全景(北から) 上段右上:

3区江戸時代小溝全景(東から) 上段右下: 3区鎌倉

時代以降小溝全景(北から)

下段: 1区江戸時代小溝全景(東から)

**図版60 B地区古墳〜室町時代 土器・土錘・鏡・銭貨**

1〜3区第4層

**図版61 B地区古墳時代後期 土器(1)**

B406-0D

**図版62 B地区古墳時代後期 土器(2)**

B149-0S、B798・472・474・844・834・799-0D

**図版63 B地区古墳時代後期 土器(3)**

B800・801-0D、B823-0P、B213-0S、B160-0O

**図版64 B地区古墳時代後期 土器(4)**

B213・152-0S、B406・476-0D

**図版65 B地区古墳時代後期 土器(5)**

B476・469-0D、B483・200・402・409・441-0O、B

447-0S

**図版66 B地区古墳時代後期 土器(6)**

B77・93・94・95・402-0O

**図版67 B地区古墳時代後期 土器(7)**

B371・420・811・495-0O、B10-0R

**図版68 B地区古墳時代後期 土器(8)**

B151・51・153・91・92・482-0S

**図版69 B地区古墳時代後期 土器(9)**

B482-0S

**図版70 B地区古墳時代後期 土器・石製品**

B507-0D、B158・93・74-0O、1区第6層

**図版71 B地区古墳時代後期 須恵器「ヘラ」記号**

**図版72 B地区製塩土器・サヌカイト剥片**

上段: (製塩土器) B478・480・475-0D

下段: (サヌカイト剥片) B473・471-0D

**図版73 C地区 遺構**

上段: 調査区全景(北から)

下段: C-1区全景(南から)

**図版74 C-2区 遺構(1)**

**図版75 C-2区 遺構(2)**

**図版76 C-2区奈良〜平安時代 掘立柱建物(1)**

上段: C2001-0B 全景(上方が北)

下段: C2001-0B 柱穴土層断面(C1030・1039・546  
・1544-0P)

**図版77 C-2区奈良〜平安時代 掘立柱建物(2)**

上段: C2003-0B 全景(上方が北)

下段: C2004-0B 全景(上方が北)

**図版78 C-2区平安時代 掘立柱建物(1)**

上段: C2005-0B 全景(上方が北東)

下段左: C2007-0B 全景(上方が東)

下段右: C2011-0B (上方が北)

**図版79 C-2区平安時代 掘立柱建物(2)**

上段: C2009-0B 全景(上方が東)

下段: C2008-0B 全景(上方が北東)

**図版80 C-2区奈良〜平安時代 建物柱穴土層断面**

1. C574-0P (C2003-0B)

2. C582-0P (C2003-0B)

3. C855-0P (C2009-0B)

4. C857-0P (C2009-0B)

5. C864-0P (C2009-0B)

6. C811-OP (C2009-OB)  
 7. C831-OP (C2008-OB)  
 8. C1852-OP (C2010-OB)
- 図版81 C-2区古墳～平安時代 溝・土坑**  
 上段：C1171-OS 全景 (南東から)  
 下段：C915-OO 全景 (南から)
- 図版82 C-2区奈良～平安時代 溝・土坑**  
 上段：C1040-OO、C892-OS 全景 (南から)  
 下段：C935・936・937-OS 全景 (東から)
- 図版83 C-2区鎌倉～江戸時代 遺構**  
 上段：中央部全景 (北西から)  
 下段：C1237-OS 全景 (北西から)
- 図版84 C-3区 遺構<sup>1)</sup>**  
 上段：全景 (北西から)  
 下段：南半部全景 (上方が南西)
- 図版85 C-3区 遺構<sup>2)</sup>**  
 上段：北半部全景 (上方が南西)  
 下段：中央部全景 (上方が南西)
- 図版86 C-3区古墳時代前期 溝**  
 上段：C1830-OS (北西から)  
 下段：同上遺物出土状況 (南西から)
- 図版87 C-3区古墳時代後期 溝<sup>1)</sup>**  
 上段：C1372・1373-OS (北西から)  
 下段：C1373-OS 遺物出土状況 (北東から)
- 図版88 C-3区古墳時代後期 溝<sup>2)</sup>**  
 上段：C1766-OS 全景 (北西から)  
 下段：同上土層断面 (北西から)
- 図版89 C-3区平安時代 掘立柱建物<sup>1)</sup>**  
 上段：C2012-OB 全景 (東から)  
 下段：C2012-OB 柱穴土層断面 (C1831・1510・1400・1494-OP)
- 図版90 C-3区平安時代 掘立柱建物<sup>2)</sup>**  
 上段：C2013-OB 全景 (北西から)  
 下段：C2013-OB 柱穴土層断面 (C1794・1747・1726・1732-OP)
- 図版91 C-3区平安時代 掘立柱建物<sup>3)</sup>**  
 上段：C2015-OB 全景 (北西から)  
 下段：C2015-OB 近景 (北西から)
- 図版92 C-3区平安時代 建物柱穴土層断面<sup>1)</sup>**  
 C2015-OB
1. C1643-OP 2. C1589-OP 3. C1592-OP  
 4. C1588-OP 5. C1591-OP 6. C1587-OP  
 7. C1590-OP 8. C1585-OP
- 図版93 C-3区平安時代 建物柱穴土層断面<sup>2)</sup>**  
 C2015-OB  
 1. C1575-OP 2. C1576-OP 3. C1592-OP  
 4. C1588-OP 5. C1572-OP 6. C1587-OP  
 7. C1590-OP 8. C1585-OP
- 図版94 C-3区平安時代 建物柱穴細部<sup>1)</sup>**  
 上段：C1579-OP (C2015-OB) 遺物出土状況 (北東から)  
 下段：C2015-OB 根石検出状況 (C1577・1579・1583-OP)
- 図版95 C-3区平安時代 建物柱穴細部<sup>2)</sup>**  
 上段：C1592-OP (C2015-OB) 柱痕 (西から)  
 下段：C1568-OP (C2015-OB) 柱痕 (北から)
- 図版96 C-3区平安時代 溝<sup>1)</sup>**  
 上段：C1637・1638-OS (西から)  
 下段：C1638-OS 遺物出土状況 (東から)
- 図版97 C-3区平安時代 溝<sup>2)</sup>**  
 上段：C1638-OS 土層断面 (南西から)  
 下段：C1639・1640-OS (北東から)
- 図版98 C-3区平安時代 土坑<sup>1)</sup>**  
 上段：C1565-OO 全景 (北西から) ※右はC1642-OO  
 下段：C1565-OO 遺物出土状況 (西から)
- 図版99 C-3区平安時代 土坑<sup>2)</sup>**  
 上段：C1642-OO 全景 (北西から)  
 下段：C1642-OO 遺物出土状況 (北東から)
- 図版100 C-3区平安時代 土坑・溝**  
 上段：C1678-OO 全景 (南西から)  
 下段：C1641-OS (北東から)
- 図版101 C-3区鎌倉時代 溝**  
 上段：C1332・1354～1359-OS (北東から)  
 下段：C1494・1493-OS 細部 (南西から)
- 図版102 C-3区鎌倉時代 轍<sup>1)</sup>**  
 上段：C1997-OX 検出状況 (南東から)  
 下段：C1997-OX 完掘状況 (南東から)
- 図版103 C-3区鎌倉時代 轍<sup>2)</sup>**  
 上段左：C1364-OS (C1997-OX) 土層断面 (北西から)  
 上段右：C1364-OS (C1997-OX) 検出状況

下段：C1998・1995-OX 全景（南東から）

**図版104 C-4区古墳時代 遺構**

上段：全景（南東から）

下段：C437-OS 全景（北西から）

**図版105 C-4区古墳時代前期 土墳墓**

上段：C436-OO（北東から）

下段：同上土器出土状況（北東から）

**図版106 C-5区古墳時代前期 土墳墓(1)**

上段：全景（北西から）

下段：C328-OO 全景（南から）

**図版107 C-5区古墳時代前期 土墳墓(2)**

上段：C390-OO 全景（東から）

下段：同上土器出土状況（東から）

**図版108 C-5区古墳時代前期 土墳墓(3)**

上段：C343-OO 全景（東から）

下段：C313-OO 全景（南東から）

**図版109 C-5区古墳時代前期 土墳墓・溝**

上段：C374-OO 全景（北西から）

下段：C300-OO 全景（北北西から）

**図版110 C-5区鎌倉時代 耕作面(1)**

上段：第III Ba層上面 全景（南東から）

下段：第III Ba層除去後 全景（南東から）

**図版111 C-5区鎌倉時代 耕作面(2)**

上段：C179-OX 検出状況（北東から）

下段：C179-OX 調査後（北東から）

**図版112 C-6区 遺構**

上段：全景（上方が南西）

下段：全景（南東から）

**図版113 C-6区 鎌倉～室町時代 耕作面**

上段：第III Ac層上面 全景（南東から）

下段：第III Ac層上面 近景（南西から）

**図版114 C-6区 室町時代以降 耕作面**

上段：C116-OX 土層断面（北東から）

下段：第III Aa層上面 全景（南西から）

**図版115 C-6区 室町時代以降 包含層及び土層断面**

上段：第III Ab層 白磁皿出土状況

下段：北側土層断面

**図版116 C地区古墳～奈良時代 土器**

C436・726・1040-OO、C875・1373・1830-OS

**図版117 C地区奈良～平安時代 土器**

C2015-OB、C726・1040-OO、C580・1556-OP、C892-OS

**図版118 C-3区平安時代 土器**

P0029、C2012-OB、C1638-OS

**図版119 C-3区平安時代 土器**

C1638-OS、SD-0177

**図版120 C地区平安～室町時代 土器**

SD-0177、C1642・1565・1678-OO、C1641-OS、第III Aa・Ab層、第III Ac層

**図版121 C-2区奈良～平安時代 土器**

上段：C2002・2003-OB

下段：製塩土器（C2003-OB）

**図版122 C-2区平安時代 土器**

上段：C2006・2007・2008-OB、C825・828・1112・1165・1556・1563-OP

下段：C2007・2009～2011-OB、C775-OP

**図版123 C-2区平安時代 土器**

上段：C2015-OB、C1603-OP

下段：C2015-OB

**図版124 C-2区奈良～平安時代 土器**

上段：C2007-OB、C915-OO

下段：C915-OO

**図版125 C-2区平安時代 土器**

上段：製塩土器（C1040-OO）

下段：C935-OO

**図版126 C-2区平安時代 製塩土器**

上段：C935-OO

下段：C935-OO

**図版127 C-2区平安時代 土器**

上段：C1565-OO

下段：C1642-OO

**図版128 C-2区奈良～平安時代 土器**

上段：製塩土器（C892-OS）

下段：C1641-OS

**図版129 C-2区平安時代 土器**

上段：C1638-OS

下段：C1637-OS

**図版130 C地区平安～鎌倉時代 土器**

上段左上：C1639-OS

上段左下：C1678-00

上段右：C1473・1480・1493・1494・1679・1701-OS

下段：C893・899・943・1155・1228・1237・1283  
・1324・1332-OS

**図版131 C地区鎌倉～室町時代 青磁**

上段：C412～424 (第III層)、C283 (C1301-OS)

下段：第III層

**図版132 C地区鎌倉～室町時代 白磁**

上段：第III層

下段：第III層

**図版133 C-2区江戸時代以降 陶磁器**

上段：C1335-OW

下段左：C1234・1236-OW

下段右：C1336-OW

**図版134 C-1・2区鎌倉～室町時代 包含層**

上段：第III A層

下段：第III A層

**図版135 C-6区鎌倉～室町時代 包含層**

上段：第III B層

下段：第III C層

**図版136 C地区 石器**

上段：石鏃・尖頭器・石錐

下段：くさび形石器・スクレイパー

**図版137 C地区 石器**

上段：尖頭器・石核・スクレイパー

下段：剥片・チップ

**図版138 C地区 石器**

上段：C2007-OB

下段：C2015-OB

**図版139 C地区平安～江戸時代 柱材・銭貨・鉄器片**

上段左：C2001-OB

上段右：C2015-OB

下段左上：C523 (C-1区第III Ab層)

下段左下：C524 (C-6区第III Ac・Ad層)

下段右：鉄器片 (C-4区第III B層)



# 第1章 経 過

## 第1節 調査に至る経過

三田遺跡の発掘調査は、府道磯之上山直線<sup>いその かみやまだいせん</sup>の建設工事を契機に始まった。

磯之上山直線は大阪府臨海線磯之上地区と大阪外環状線積川地区とを連絡する路線で、牛滝川流域を貫通する形で計画決定がなされていた。牛滝川流域は、歴史地理的にみて、遺跡が垂直的に分布する地帯であることが十分に予測されていたが、埋蔵文化財の実態には不明な点が数多く残されていた。計画路線に抵触する箕土路遺跡、今木廃寺、山直北遺跡など一部の遺跡に関しては、部分的な調査が実施されていたが、その成果は断片的な資料に限定されていた。三田遺跡の場合も、表採遺物の報告がなされていた程度であった。このような状況下で建設工事が具体的に動き始めると、多くの埋蔵文化財が未確認のまま破壊される事態が憂慮されるようになった。このため、大阪府教育委員会は府土木部に対して道路建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する十分な調整と協議を申し入れた。協議の結果、計画路線内の遺跡分布と現状を確認することを目的とする分布調査を実施することになった。分布調査は、箕土路地区より積川地区までの約6km間を対象に昭和58年11月に実施された。分布調査は地形と字名の調査と遺物の表面採取を主とするものであったが、新たに11ヶ所の遺跡の確認と、牛滝川流域が遺跡の濃密に分布する地帯であることが考古学的に裏付けられた。この結果を受けての大阪府教育委員会と府土木部との協議の結果、磯之上山直線建設予定地内の遺跡に関しては、事前に全線試掘調査を実施しその取り扱いを協議するという方針が導き出された。

三田遺跡の道路建設に伴う最初の発掘調査は、大阪府教育委員会により昭和59年に実施された(第1次調査)。擁壁部建設工事前の事前調査と試掘調査を兼ねるもので、本報告で呼称するC地区からA地区までの全長約650m間を対象となった。その後の発掘調査は、磯之上山直線建設工事が関西新空港関連事業に認定された結果、昭和60年度に設立された財団法人大阪府埋蔵文化財協会に引き継がれることになった。今回報告する三田遺跡A・B地区は昭和61年度に、三田遺跡C地区は昭和62年度に、各々第2次調査、第3次調査として本協会により発掘調査が実施された。本路線内の三田遺跡の発掘調査は、藤池を除くと第3次調査をもって終了したことになる。

(小山田)

## 第2節 調査経過

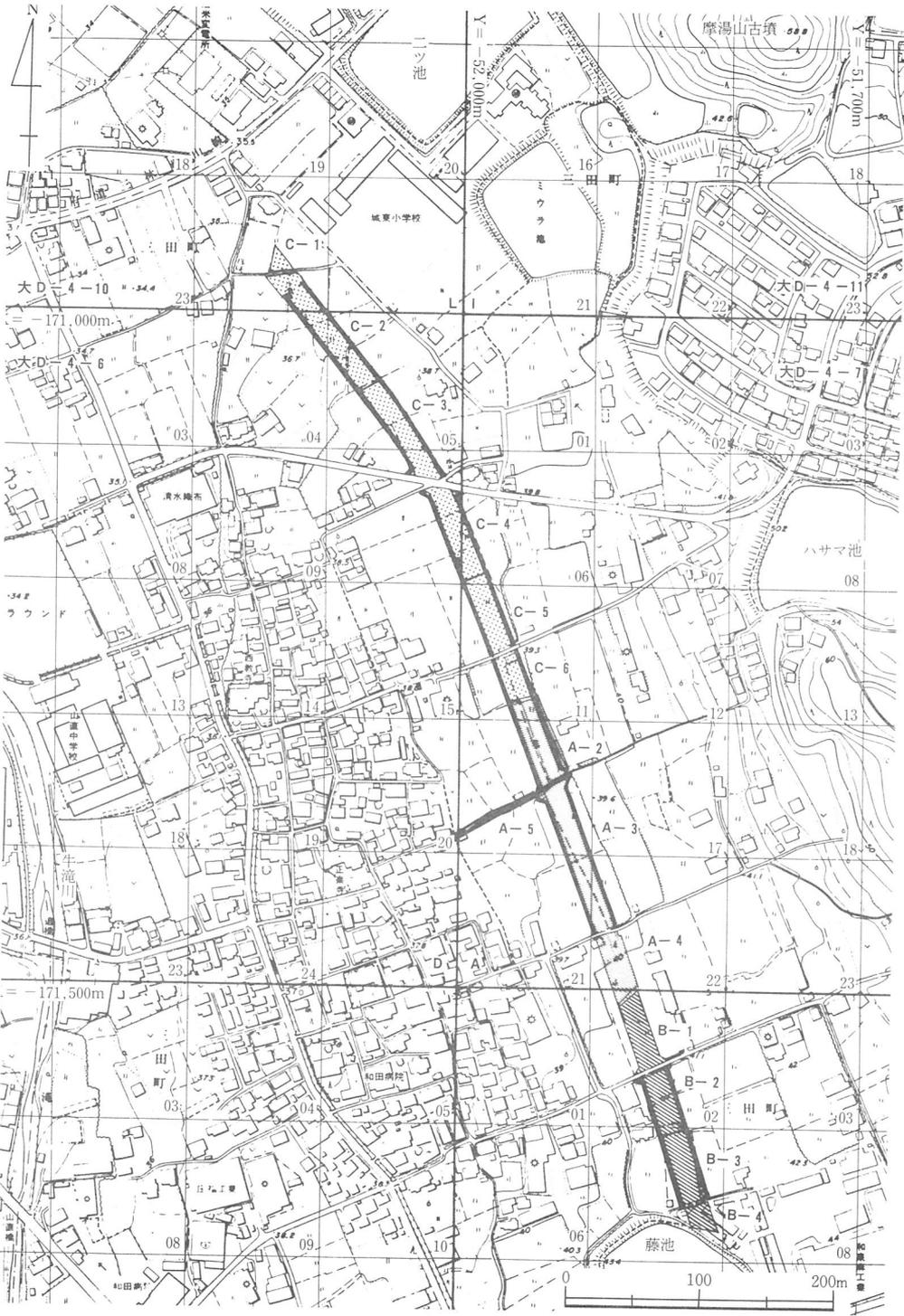
### 第1項 第1次調査

計画路線内の擁壁工事箇所を調査対象とする発掘調査で、大阪府教育委員会により実施された。昭和59年12月4日に始まり昭和60年3月30日に終了した。調査トレンチが幅3mと狭長ではあったが、先土器時代・縄紋時代の石器、古墳時代の溝・古墳・土壌群、奈良時代～平安時代の建物群、中世の耕作面などが検出され、三田遺跡が各時代にわたる大複合遺跡であることが明らかになった。整理作業は調査概要<sup>(註1)</sup>の刊行の後、大阪府教育委員会より本協会に引き継がれ、その成果は調査区の連続するA区およびC区の調査成果に収められている。(小山田)

(註1) 大阪府教育委員会「三田遺跡発掘調査概要」1985

第1表 三田遺跡調査地区一覧表

調査年次	調査地区	調査期間	本書での報告箇所	担当者名
第1次(84)	北半部擁壁	84年12月～ 85年3月	第V章、第VII章 に含めて報告	大阪府教育委員会 小山田
第2次(85)	A地区(1区 ～4区)	85年11月～ 86年3月	第V章で報告	岩崎、田中(龍)、 服部
〃	B地区(1区 ～4区)	85年11月～ 86年3月	第VI章で報告	渡辺、渋谷、 田中(一)
第3次(86)	C地区(1区 ～6区)	86年7月～ 87年2月	第VII章で報告	小山田、宮崎、 田中(一)
〃	中央部擁壁 水路改修部分	86年11月	第V章で報告	小山田、宮崎
〃	A-5区 (横断道擁壁部)	86年1月	第V章で報告	大阪府教育委員会 藤沢
〃	D地区 (南側擁壁部)	87年2月～ 同年3月	第VI章で報告	渡辺



第 1 図 三田遺跡調査地位置図 (1/5,000)

## 第2項 A地区(第2次調査)

A地区の調査に当っては、国土座標による地区割とは別に、調査区を横断する道路により1～4区に区分した(第11図)。

1985年11月25日、1・2・4区の機械掘削を開始し12月3日終了した。約3×20mという小面積の1区は12月4日に調査終了し、12月5日からは2・4区の人力掘削に入り、まず第Ⅲ層の除去につとめた。2区では12月10日、4区では20日頃から遺構検出、続いて遺構掘削を行い、1986年1月14日航空測量用の空中写真を撮影した。そして若干の補足調査の後、1月17日から埋戻したが、その際重要遺構部分は遺構面保護のため30cmの厚さで砂を被覆させた。1月25日からは3区の機械掘削を行い、30日からは人力による包含層掘削にかかった。2月5日からは遺構検出及び掘削作業を行い、2月14日～18日のB地区埋戻し作業終了を待って2月19日から進入路部分を機械掘削し、2月23日から全面清掃し2月26日航空撮影により調査の主要部は終了した。以後補足調査を行い3月7日から埋戻し作業を開始した。この際も2・4区と同様主要遺構部分については砂による被覆を30cmの厚さで行った。以後後片付けを行い、3月15日現地におけるすべての作業を終了した。(岩崎)

## 第3項 B地区(第2次調査)

この調査区は、A地区とほぼ同時に調査を開始した。1985年11月上旬より調査のための準備に取り掛かり、1986年3月末に調査を終了した。

11月下旬より北半部の表土層掘削を始めた。後の調査方法の章で詳しく説明するが、B地区は調査の便宜上北側から1～4の小調査区に分割した。調査は北側の1、2区から行い、次に反転して3、4区を実施する手順で行った。

12月上旬から1、2区の江戸時代包含層掘削作業を開始した。中旬には、鎌倉～室町時代包含層の上面で溝、耕作に伴う小溝等を検出した。

下旬からは、鎌倉～室町時代包含層の掘削と遺構検出作業を実施した。またこの時期に1区北側及び2区については、古墳時代包含層の掘削を開始した。鎌倉～室町時代の遺構としては、1区で掘立柱建物、溝、土坑、「中世素掘溝」が、2区では調査区を横断する溝及び土壇等が見つかった。

翌1986年1月からは、古墳時代包含層の掘削並びに遺構精査を継続した。中旬には遺構の掘り下げと並行して、1、2区の東側に設けられた進入道路部分の調査を実施した。下旬には、遺構の写真撮影とヘリコプターによる1回目の航空測量を含む実測作業を行った。

2月上旬に、遺構の断ち割り及び掘立柱建物柱穴等の断面図、詳細図の作成作業を実施

して、中旬までに調査を終了した。

3、4区については、1、2区の埋め戻し完了後の2月下旬から表土層掘削を開始した。3月上旬には、江戸時代包含層並びに鎌倉～室町時代包含層の掘り下げを行った。1、2区とほぼ同様、耕作に伴う小溝、溝等の遺構が2面確認された。

3月中旬から、古墳時代包含層の掘削及び遺構検出に取り掛かった。またこの時期から1、2区と同様に3区の東側に設けられた進入道路部分の除去と調査を実施した。

4区については、後世の攪乱と削平によって遺構の残りが悪った。それに対して、3区は古墳時代包含層の削平が見られるものの、竪穴住居、掘立柱建物、土壇(土坑)、溝等の多量の遺構が認められた。

これによって、1区南側と、2区南半部から3区にかけての一带に古墳時代後期の集落が展開していることが明らかとなった。

3月下旬から末にかけては、2回目の航空測量と遺構の写真撮影、詳細図の作成等の作業を実施して全ての調査を完了した。(渡辺)

#### 第4項 C地区(第3次調査)

当調査区は、三田遺跡をほぼ南北に縦断し、全長約380m、幅14mを測り、調査面積は約5,000m<sup>2</sup>。史跡摩湯山古墳の南西約400mに位置し、昨年度に調査された三田遺跡A地区に南接する。

1986年6月上旬に機械掘削・人力掘削の調査工事を発注し、7月上旬より機械掘削を開始した。

なお、調査の開始にあたっては、調査区内に横断する道路があるため、あらかじめ調査対象地を1～6の小地区に分け、その進行に併せて5・6、1・4、2・3区と3回に分けて調査を行った。

7月上旬から5・6区の中世包含層掘削作業を開始した。中旬には、鎌倉～室町時代包含層の上面で耕作に伴う小溝・畦畔等の遺構が2面検出された。8月中旬に入ると、5区のV層上面で、古墳時代前期末の土壇約160基、溝一条を確認した。6区では古墳時代後期の溝、土坑を確認した。8月下旬から遺構精査を行い、9月上旬に遺構の写真撮影とヘリコプターによる1回目の航空測量を実施し、調査を終了した。

1、4区については、5、6区の埋め戻し完了後の9月上旬から機械掘削を開始する。

1区については9月下旬までに中世包含層の掘削を終え、V層上面で検出した奈良時代の溝、柱穴、鎌倉～室町時代の小溝の遺構精査を行う。4区ではV層上面で、古墳時代前

期の土坑を検出した。9月末に2回目の航空測量を実施し、10月上旬に調査を終了した。

2、3区については10月上旬から、東側に幅4mの進入路を残して機械掘削を開始した。稲の刈り入れが終了した10月中旬に、2・3区の東側に設けた進入路の部分の掘削を開始した。

11月上旬には中世包含層の掘削をすべて終え、V層上面での遺構検出作業に移った。

2区では、古墳時代の溝一条、奈良～平安時代の掘立柱建物・土坑・溝・柱穴、鎌倉時代の耕作に伴う小溝・区画溝・踏み込み跡等の多量の遺構を確認した。

3区については、中央から南寄りに集中して古墳時代後期の溝、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝、鎌倉時代の<sup>わだち</sup>轍・小溝・区画溝・土坑等多くの遺構を検出した。

12月中旬にはヘリコプターによる3回目の航空測量を実施した。2月上旬には遺構の断ち割り及び掘立柱建物柱穴等の断面図、詳細図、遺構個別の写真撮影を行い、調査を終了した。

保存協議の結果、古墳時代前期～鎌倉時代の遺構については、殆どが保存されることになり、海砂によって遺構を保護して、埋めもどした。 (宮崎)

#### 第5項 D地区 (第3次調査)

B-2区、B-3区の東西両側部分で、道路建設に伴う擁壁工事にかかる範囲をD地区として調査に取り掛かった。調査は、1987年2月16日から同年3月3日までの13日間実施した。後の調査方法でも説明するが、西側を1区、東側を2区と呼称する。

表土層の掘削は2日間で終了し、その後江戸時代、鎌倉～室町時代の包含層を順次掘り下げた。途中鎌倉～室町時代包含層の上面と、古墳時代包含層の上面で遺構の精査を実施したが、耕作に伴う溝、小溝等の遺構のみ検出された。この作業に約4日を要した。

次に、古墳時代包含層の掘削及び遺構の精査作業を行った。北側遺構の完掘を含めて4日間で行った。残り3日間で遺構、土層断面の写真撮影と実測作業を実施して、調査を終了した。 (渡辺)

## 第II章 三田遺跡と周辺の環境

### 第1節 位置と地理的環境 (第2・3図)

#### 位置

三田遺跡は、大阪府岸和田市三田町に所在している(第2図)。以前に土木工事や耕作作業中に須恵器・中世土器が採集され、B地区2区付近に三田ノ辻寺院跡が推定されていた。<sup>(註1)</sup>

今回の磯之上・山直線建設に伴う分布調査をはじめとする一連の調査で、縄紋時代草創期・古墳時代・平安から鎌倉時代を中心とした複合遺跡であることが判明し、遺跡の範囲が南北0.9kmと限定された。

大阪府の南西部に位置する岸和田市は、東は和泉市、北は泉北郡忠岡町、西南は貝塚市、南は和泉山脈を挟んで和歌山県那賀郡那賀町・伊都郡かつらぎ町に接し、西は大阪湾に面した南北に長い市域を有している。大正11年に市制を施行し、昭和10年代から戦後に町村合併を繰り返し、現代に至っている。現在70.85km<sup>2</sup>の面積を有する人口18万7千人の都市で



第2図 三田遺跡の位置図 (1/25,000)

ある。市域は、南北17.3km・東西7.5kmで、旧岸和田城下を中心とする海浜平野部と、東南の和泉山脈と谷筋・丘陵地・段丘部からなる。海浜平野部は早くより市街地化されているが、その他は大阪の通勤圏にあって除々に人口が増し、開発が進行している。和泉では、泉北の堺市・和泉市に対して泉南の中心的な存在で、商工業都市として泉州の重要な位置をしめている。

近年では、和泉の風景の一つである多数の溜池群は埋め立てられ農家も減少しているが、神於山に源をもつ津田川や三田遺跡の所在する牛滝谷周辺には、今でも良好な農村風景が残されている。

岸和田市三田は、旧山直郷に属する大字で、字地に「池樋」・「小倉」があり、昭和17年に山直町から岸和田市に編入された。三田の「みた」は、田の美称や屯倉からの転化とも言われている。比較的早くから段丘面の開発の進んだ土地で生産が優れていたのだろう。

調査地は、一部の民家地の他は水田及び畑地で、標高 T.P. 35.7m～43.0m と谷奥部にいくに従って比高を増している。

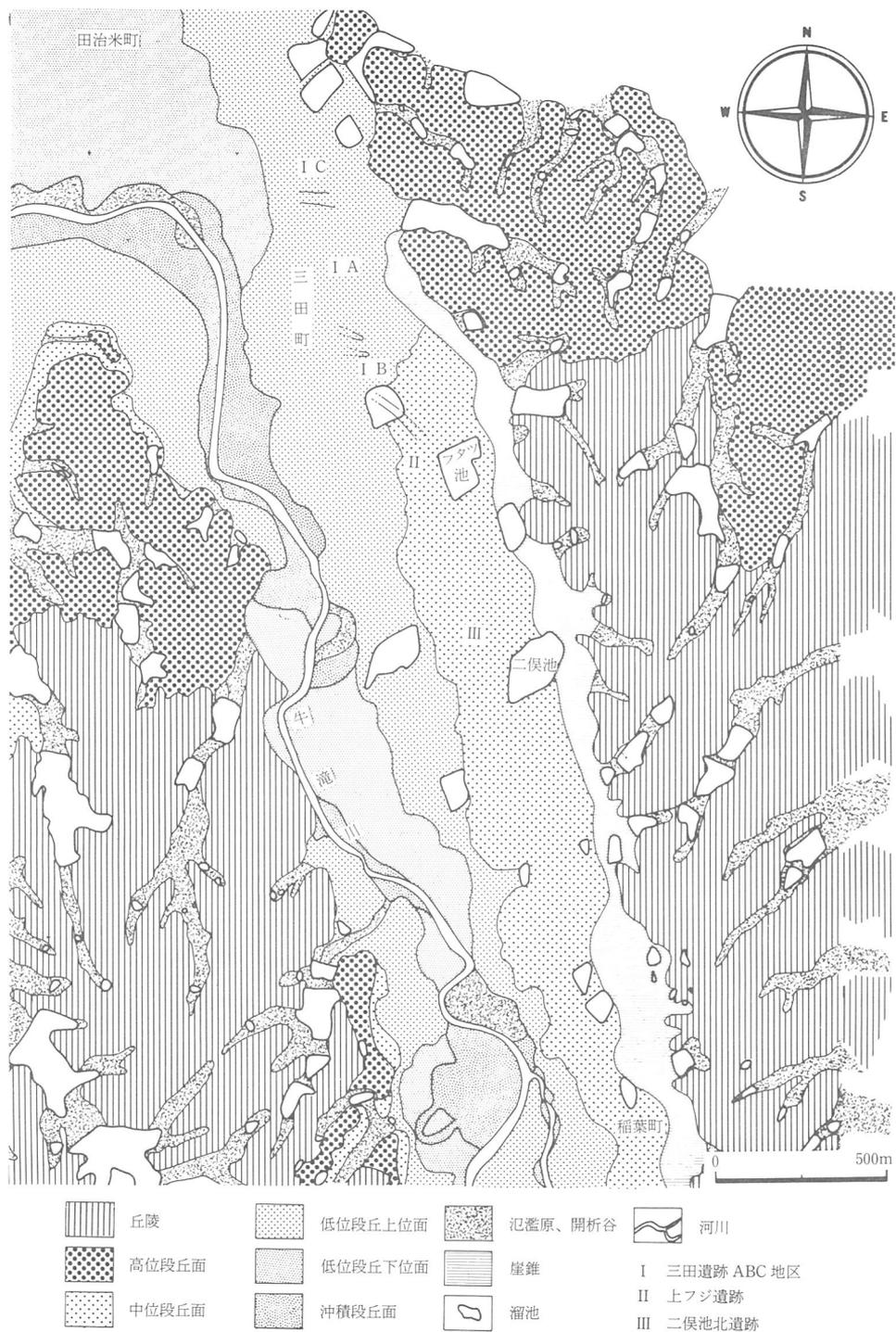
## 地理的環境

大阪府の西1/3を占める和泉地域は、北の摂津・東の河内地域とは異った地形的変化をみせ、地理的条件ゆえに文化的にも独自のものを育んできた。

南北に延びる基盤山地の和泉山脈から張り出す丘陵と洪積段丘が発達している。それを深く開削して大阪湾に注ぐ各河川によって樹枝状の尾根と谷とを形成し、起伏に富んだ地形を呈しているのが特徴である。このことから、河岸段丘が発達した河川流域の谷筋は、地形的にも一つの小地域を形成し、一定のまとまりを構成しているといえる。北から言えば、石津川の石津川流域や、さらにその上流を流れる前田川流域、和田谷の和田川流域、和泉の中心的谷節である槇尾谷の槇尾川流域、松尾谷の松尾川流域、東山丘陵と岡山丘陵に囲まれた山直谷の牛滝川流域、さらに尾生谷・阿間河谷の津田川流域、春木・天の川流域などを把握することができる。

また、これらの小地域は、奈良時代に設けられた郡・郷と一致しており、岸和田は和泉郡木嶋<sup>きじま</sup>・掃守<sup>かもり</sup>・八木<sup>やぎ</sup>・山直郷<sup>やまだい</sup>にあたっている。

洪積段丘が海岸付近まで広く発達している為、沖積地は非常に狭い。段丘面は水利が悪く農業用水を得るのに困難であり、開発にあたっては無数の溜池を必要とした。現在も溜池が多く点在するのは和泉地方の特徴である。



第3図 三田遺跡周辺の地形分類図 (1/20,000)

洪積段丘の高位面や中位面は、現在は平坦地化されて、集落と共に生産地として利用され、水田・畑地が広がっている。低位面は広い範囲に発達し、平野部の大半を占めている。

また、派生した高位面の縁辺部には、洪積段丘の中位面や低位段丘が形成され、各集落遺跡はその上に占地していることが多い。また現代の自然集落もそれらの上に立地しているものが多い。

三田遺跡は、和泉山脈から派生する岡山丘陵と東山丘陵との間の面に広がる中位段丘低位面の外線部の、通称牛滝谷（山直谷）に位置し、牛滝川が山直谷から流れ出す谷口部分の段丘崖に当る。即ち、遺跡は東山丘陵から派生する舌状地形に立地していることになる。

牛滝川は、葛城山頂付近から大沢・内畑・稲葉の山間部を通り、岡山・今木を経て久米田池付近で天ノ川に分流して、高月で松尾谷の松尾川と合流し、忠岡町馬瀬で榎尾川と合流、大津川となって大阪湾に注いでいる。地形分類図（第3図）からも分かるように、牛滝谷の開口部付近では、北は磯之上から今木・田治米の平坦な沖積段丘面・洪積段丘下位面と牛滝川氾濫原が形成され、南は岡山・東山丘陵に挟まれた中位段丘面・低位段丘上位面と丘陵とで占められている。西の丘陵・洪積段丘高位面では開折谷が発達し、溜池が構築・利用されている。

現在の三田集落の南方の藤池・二ツ池で東山丘陵から開折谷が入りこんでいるが、三田集落のあたりまでは比較的フラットな地形を見せている。しかし、中世以前においては、大きな開折谷から派生した浅い谷筋が数丈も入りこんで集落空間を構成していたことを調査結果でも得ている。

地山は基盤層の黄色粘土、もしくは砂礫層で、G.L.  $-0.5 \sim -0.6\text{m}$  で達する。標高は海側で T.P. 35.2m、山側で 41.7m と 6.5m の比高差を持ちながら、山直北遺跡の縁辺部の山ノ内付近で急激な落ちを見せ、低位段丘下位面との境となっている。<sup>(註2)</sup>（田中一）

註1. 文献C7 地元の玉谷哲氏らが遺物を採集されている。文献A10『岸和田市史付図3岸和田市遺跡図』

2. 三田遺跡以北の地形については協会報告書 文献F11 岡本武司「軽部池西遺跡調査区周辺地形図」にくわしい。

## 第2節 歴史的環境 (第4～6図、第2表)

この項では、和泉地域の牛滝谷周辺の人間と遺跡との関わりについて、考古学的な面を中心に歴史環境を述べておきたい。

和泉では、昭和30年代後半から泉北丘陵のニュータウン造成や、昭和40年代の第二阪和国道の建設に端を発した大規模開発に伴う事前調査を契機として、大阪府教育委員会や遺跡調査会が度々組織され、実施されてきた道路・住宅建設の調査、あるいは市町村を中心とした小規模の地道な調査によって、先土器から近世に至る各時代の遺跡群の動態が解明され、考古学的な歴史像が急激に判明してきている。

和泉地域における先土器時代遺物の最古の例としては、堺市・野々井遺跡出土のルヴィロワ型石核がある。

最後のウルム氷河期の終わり頃の国府文化期のものとなると、各地で遺物がみられるが、そのほとんどが断片的資料であり、当時の生活跡を復原しうるまでには至っていないのが現状である。

牛滝谷周辺には先土器時代の遺物を出土する遺跡が比較的多い。台地上に立地する岡山町の西山遺跡や上フジ遺跡・葛城山頂・貝塚地藏堂遺跡などで、縄紋、弥生の石器と共に国府型ナイフ形石器が採集されており、その分布は、近年かなりの広がりを見せてきている。また、万町北遺跡・琴山遺跡・畑遺跡からは、ナイフ・削器・船底形石器・剝片石器などが出土している。近年、平野部の高石・和泉・泉大津市に広がる大園遺跡では、ナイフ形・船底形・削器などの石器が出土するなど、まとまった資料を提供している。しかし、これらの資料は採集資料や後生の混入であり、遺構に伴ったものではないので、遺物の層位・石器組成など不明な点が多い。

岸和田周辺では、まだまだ資料が乏しく、堺市の南花田遺跡や河内の挟山遺跡のような国府文化期の住居跡の検出にまで至っていない。大阪層群から2万2千年前の始良火山灰を検出する事も含め、資料を集積する事が今後の課題である。

縄紋時代では、縄紋草創期の有舌(茎)尖頭器の検出が近年各地で増加している。牛滝谷周辺でも石器を出土する遺跡が比較的多く、栄ノ池遺跡・下池田遺跡・貝塚王子遺跡・伯太北遺跡・A91地点遺跡・大野池・信太山遺跡など、和泉で15ヶ所以上を数える。しかし、何れも遺構を伴ったものではなく、定着生活が営まれていたかどうかなど、その実体は解っていない。

三田遺跡A地区では、有舌尖頭器が黄色粘土層中から出土した。黄色粘土層は、地山と考えられていた段丘礫層の窪地に堆積した層である。同じように、低位段丘に立地する大園遺跡でも洪積層粘土の3ヶ所のユニットから数十点の有舌石器類が検出され、石器製作跡として注目されている。この層や有舌尖頭器の時期の検討が今後の課題となる。

縄紋時代には、おおむね瀬戸内文化圏に属している。和泉地域の最古の土器として、貝塚市畠中遺跡から神宮寺式土器が採集されている。この他にも、早期の土器は、60年度に協会が調査を行った和泉横山の仏並遺跡から「繊維土器」や関東の鶉ガ島台式土器などが出土している。仏並遺跡は、中期末から後期の集落の中心部分が調査され、泉州地域のなかでも良好な状態で住居跡が検出されたことから、集落構造の解明が期待されている。

牛滝谷周辺では、浜堤後背斜面に中期から晩期にかけての春木八幡山遺跡や、中期後半から後期にかけての葛城山頂遺跡が知られている。葛城山頂遺跡は、標高850mと畿内でも有数の高所に位置し、器面に粗い斜縄文を持つ土器を出土する。

牛滝谷周辺では、まだまだ縄紋時代の遺跡の実態が解っていないが、近年、縄紋土器の出土する遺跡が増加してきている。牛滝川・天ノ川に挟まれた低位段丘の箕土路遺跡では、中期の鷹島式の爪形文土器が比較的まとまって採集されている。軽部池西遺跡の後期の流路（B589-OR）からは、生駒西麓産の胎土を持つ北白川上層式土器の深鉢・注口土器や、二枚貝条痕をもつ元住吉山式の土器が出土している。また中津式から滋賀里式の土器が流れ込んでいるが、あまりローリングを受けていないことから、田治米宮内付近にこの時期の集落が埋まっている可能性があると思われる。

貝塚地域の脇浜遺跡では、アジロ底を持つ滋賀里式土器が後期から連続するのではなく、晩期から出現しており、同じ泉州地域でも軽部西遺跡とは様相を異にしている。栄ノ池遺跡からは、混入したものであるがトロトロ石器（異形局部磨製石器）が出土している。

三田遺跡南方4kmの牛滝川上流右岸、積川町のこそ谷にサヌカイト原石の散布地があり、三田遺跡周辺では二上山産出のサヌカイトと共に使用されていたとも考えられる。今年調査された山ノ内遺跡B地区で、サヌカイト製石鏃など石器が数千点以上出土した。石器原石の集積ピットもあり、石器製作が行われていたと考えられ、原産地との関係が注目される。また、榛原石（流紋岩質溶結凝灰岩）製の叩き石や宮滝式土器・メノウや黒曜石も出土しており、大規模な集団の移動が想定される。この他にも縄紋時代の風倒木痕が大規模に確認された。縄紋時代末期に巨木が根こそぎ倒れており、縄紋環境を知る好資料である。山ノ内縄紋集落の外苑には、樹木に覆われた森林が広がっていたなど、ムラはずれの様子が

明らかとなった。

晩期の遺跡として、**春木天ノ川遺跡**が早くから知られている。天ノ川遺跡は氾濫原に位置しており、水稻栽培の伝播により晩期の段階で集団が再編成されて弥生環境にはいる要因となったことが遺跡立地のあり方の変化から読み取れる遺跡でもある。

いずれにしても、泉州地域で中期から後期にかけての土器が検出された遺跡の広がりを見ると、遺跡数が増加するという傾向にある。出土遺跡は、後期16ヵ所以上、晩期22ヵ所以上が確認されている。牛滝谷周辺には記した以外に**伯太北遺跡・万町北遺跡・府中遺跡・和気遺跡・栄ノ池遺跡**などがある。遺跡数の増加の要因として、集団の分散・移動が活発化することと同時に入口の増加が挙げられよう。しかし、遺構を伴ったものは少ない。

そして晩期の後半になると、3倍の遺跡が出現することが指摘されている。これは、弥生時代前期の遺跡数と等しいと言える。

和泉地域においても、水稻耕作の開始は縄紋時代晩期にまで遡ることが知られてきた。弥生時代全体を通じて集落が営まれており、北部の拠点集落であった堺市の**四ツ池遺跡**においては、縄紋時代から弥生時代前期前半にかけての文化的推移を見ることができる。この他にも前期前半の土器を伴った集落は、泉大津市**池浦遺跡**などが知られている。現在のところ、牛滝川流域の岸和田市域で弥生土器が出現する時期は、前期後半になってからと考えられ、春木八幡山遺跡や田治米宮内遺跡を拠点として弥生文化を開花させている。しかし泉州南部では、泉佐野市**船岡山遺跡B地点**において、縄紋晩期の突帯文土器と前期後半の土器が共伴して出土していることから、縄紋時代から弥生時代への文化的推移は、南部では若干遅れる可能性がある。

**春木八幡山遺跡**は、天ノ川の河口付近の後背湿地をひかえた海岸部の旧砂丘上に立地している。初期水稻耕作の適地としての自然環境のもとで弥生時代が開花する。牛滝谷の低位段丘縁辺の**田治米宮内遺跡**では、畿内第I様式古段階の土器が出土している。遺跡は標高34mほどの段丘上に立地しており、水稻は不向きのように思われるが、地形図を見ると明らかに遺跡東辺の牛滝川から軽部池に向かう旧河道が山ノ内遺跡A地区に延びており、岡山丘陵から大きな開折谷の地形を形成している。これらの谷筋の氾濫原や帯状の低湿地の谷地形が水稻耕作地にあたるのであろう。今後注意しなければならない。

もう一つ、前期後半出現の遺跡として、標高5 mに位置する**加守三昧山遺跡**<sup>かもりざんまいやま</sup>がある。昭和53年の調査では、紀ノ川南岸の三波変成帯の結晶片岩を使った大形石包丁7点がまとめて出土している。

弥生時代中期にはいると、遺跡数も増大し、その分布も広がりを見せる。集落はその数・規模が増大しており、可耕地が沖積地の各河川周辺に拡大したものと考えられる。前期後半に出現した泉大津市**池上・曾根遺跡**は、先の四ツ池遺跡を上回る大集落へと発展し、濠で村の周囲を囲むようになる。また、周辺にも小規模な集落が多く出現を見ている。

牛滝谷周辺域にも多くの集落が出現するが、なかでも天ノ川と春木川に挟まれた低位段丘の北側縁辺部に下池田遺跡や南辺部に栄の池遺跡が占地し、二大集落を構成している。**下池田遺跡**からは、中期を中心とする竪穴住居跡が20棟検出されている。また連鋳式銅鏃が出土しており、青銅器の生産をうかがわす集落である。**栄の池遺跡**は、中期から後期まで集落を構成していて、竪穴住居跡や掘立柱建物・方形周溝墓が多数検出されている。畿内第Ⅲ様式から畿内第Ⅳ様式を中心とした紀伊産・生駒西麓産の胎土を持つ土器が出土しており、それらの地域との活発な交流を物語っている。また、弥生後期の製塩土器も出土している。

中期後半には、春木川・津田川の低位段丘南縁辺部には、畑遺跡や**土生遺跡**が出現している。さらに、小規模なものとしては、尾生丘陵の標高60mに**兒子池東遺跡**が出現している。**土生遺跡**では、中期から後期の竪穴住居跡とともに多数の製塩土器が出土しており、一大製塩集落としての性格を有していたと思われる。**畑遺跡**からは、中期から古墳時代の多数の竪穴住居跡が検出され、ツヅミ状の大形土製品（台形土器）のような特異な遺物も検出されている。

榎尾川川筋では、左岸に**和気遺跡**が、海岸平野部には**箕土路遺跡**が出現する。これらの諸遺跡が中核をなして弥生時代が展開していったと考えられる。

牛滝谷の**田治米宮内遺跡**では、依然として集落を構成している。

このように中期になって出現する大規模な諸遺跡と、発展拡大した遺跡との関係に注意する必要がある。特に、近接する和気遺跡や軽部池西遺跡との関連を考える必要があり、牛滝谷では、臨海部とはまた異なった構成で集落を形成している。

後期には中期に出現した大部分の諸遺跡が発展的に集落を形成している他に、岡山丘陵上の丘陵斜面（標高60～70m）で中期後半から後期の竪穴住居跡が4棟検出された**どぞく遺跡**や、我国高地性集落の代表例とされている和泉市観音寺山遺跡が出現する。**観音寺山遺跡**は、標高約60mの観音寺の丘陵で100棟以上の竪穴住居跡や、集落を囲む二重のV字溝が確認されている。

津田川岸の丘陵には上松遺跡・<sup>かんまつ</sup>兒子池東遺跡の高地性集落も形成されている。高地性集落が出現する一方、平野部でも府中遺跡や和氣遺跡・下池田遺跡・上松中尾遺跡の集落が依然と営まれている。60年度の協会の調査では、箕土路遺跡の自然流路から土器が出土し、**軽部池西遺跡**では、後期の住居跡が検出された。

昨年夏の下池田遺跡の調査で、一方にブリッジを持つ全長18mの円形周溝墓が検出され、前方後円墳の発達形態の祖形と話題を集めた。幅2mの周溝から後期後半のS字状浮文をもつ装飾付き壺の供献土器が検出されて、弥生時代終末の墳墓地群と判明した。前方後円形という点で大変注目できるが、周溝墓群の中の1基であり、弥生墓制そのもので、古墳への脱皮はまだない。しかし、牛滝谷の古墳時代を考えていく上で注目される遺構である。

又、銅鐸は流木にある<sup>ながれき</sup>土田山<sup>つちだやま</sup>の丘陵西斜面の標高60mの地点から総高32cmの篇平紐式4区の袈裟禪文鐸と無文小銅鐸、<sup>こうのやま</sup>神於山で流水文銅鐸がそれぞれ出土しているが、突然の発見であり詳細は解らない。いずれにしても、山直の牛滝谷流域ではあまり可耕地は望めなかったと推定されるが、青銅器祭祀の地縁的共同体を背景にした牛滝谷流域の弥生集落の祭具であろう。

弥生時代からの不安定な小集落・集団が再び国単位で再編成される中で、さきの弥生後期の遺跡を基盤として、時間的・空間的に連続し、古墳時代へと突入していったのであろう。

このようにして古墳時代集落は、弥生集落と重複する場合が多いが、弥生の拠点集落を継続している以外に、新たに磯之上遺跡のように布留式土器を持った集落が現れることも指摘できる。古式土師器は伯太北遺跡・府中遺跡・春木天ノ川遺跡・箕土路遺跡・下池田遺跡・和氣遺跡などでも確認されている。この内の和氣遺跡では、3×4mの竪穴住居跡が9棟報告されている。

田治米宮内遺跡に近接する山ノ内遺跡では、最近の調査で庄内から布留式期の6.0×4.3mの竪穴住居跡が焼失した状態で2棟検出された。866-OD（纏向I式期）では、手あぶり形土器が壁に沿って置かれており、土器の用途を考える資料が提供された。山ノ内遺跡の集落は、弥生時代中期から流れていた当時の牛滝川の支流に挟まれる格好で立地しており、散村的色彩が強い。この頃には、沼状になった流路に巨大な樹木群が茂っていた環境にあったことが、大量に出土した木の葉と幹周り8mを越える巨株群から推察できる。

現牛滝川左岸の沖積段丘上の西大路遺跡でも畿内第V様式末期～布留式期の竪穴住居跡6棟が検出され、壁溝の板の痕跡などから壁と板とによる住居の構築方法・カマド構造を



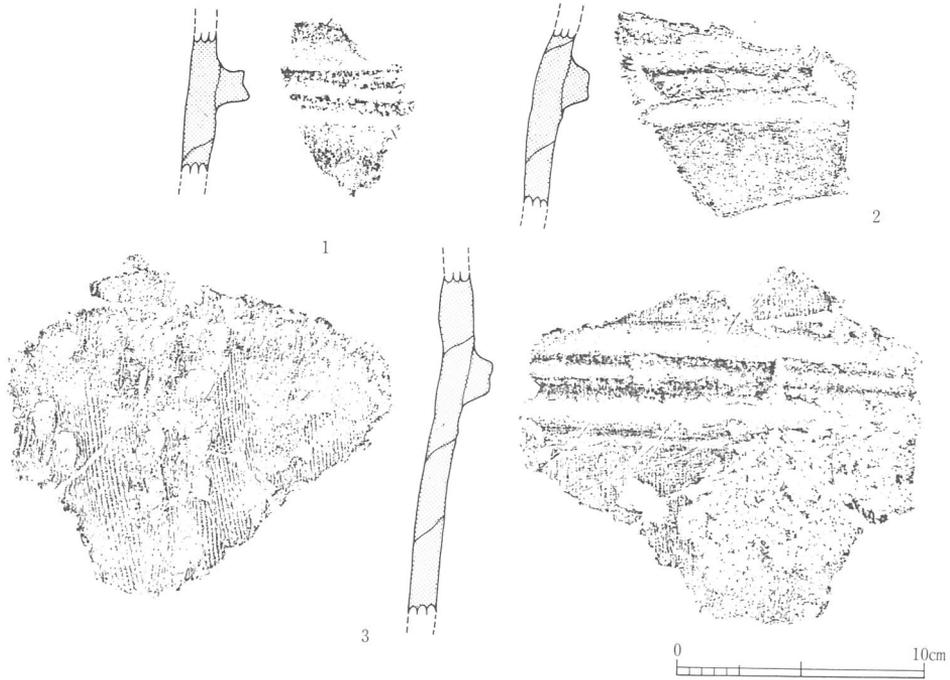
第4図 摩湯山古墳概略図(梅原図を改変約1/600)

これらの集落は、弥生以来、低位段丘の縁辺部の安定した所に住居群、浅谷が相互に完結した空間を構成している。生産の場は、埋積谷を水田として利用し、段丘上に墓地を営むなど、低湿な後背湿地など限られた環境を最大限に利用している。いずれにしても、摩湯山古墳出現前夜の集落である。

次に、古墳の分布を見てみよう。東山丘陵先端に、従来から畿内の同時期の古墳の中でも有数の規模と評価されている**摩湯山古墳**が出現し、墳丘全長約200m(?)と威容を誇っている。現在正確な測量図がなく、内容が全く不明であるが、採集の鱗付円筒埴輪や、破壊はされているが陪塚と評価される**馬子塚古墳**の平縁二神二獣鏡などの副葬品から、前期末の所産と考えられている。しかし、観察したところ、周濠といわれる長池等の池の底は周囲の田圃とレベルが同じであり、西の樋の堤を断ち割った改修工事時の観察でも、古墳堤と考えられる材料は得られなかった。さらに、前方部の墳丘裾の段はかなり手前で終わっていることや、葺石と誤解されている段丘礫層のずれなどから、規模は従来の評価よりも小さいようである。また、後円部の西側に造り出し部に似た一種の「島状遺構(?)」(図5)を有していることに注目しておきたい。採集された埴輪資料(図6)は、川西編年II型式の円筒埴輪であり、内面調整にハケ・ナデを施し、外面はタテハケ調整を行っている。馬子塚は一辺約35mの方墳で、主体部は粘土槨であるといわれている。さらに、摩湯山古

知る良好な資料が得られた。遺跡は、暴れ川の牛滝川が安定していた沖積段丘上に集落を形成していたようで、集落のすぐ横を牛滝の氾濫流路が流れている。また、その氾濫流路を制御する為に「しがらみ」が設けられていた。更に流路から溝を掘削し、堰を設けて水路を制御していたことが確認できた。

平野部では、**大園遺跡助松地区**に古墳時代前期の居住地があり、**豊中・古池遺跡**からは、木製太刀・剣・素環刀が出土している。



第5図 摩湯山古墳前方部採取埴輪（府教委保管など1/3）

墳から北に130m離れて、直径約20mの円墳**稲荷山古墳**が立地している。これらを巨視的にとらえた場合、馬子塚→摩湯山古墳→稲荷山古墳を牛滝川右岸の1つの系譜と考えることができるのではないだろうか。和泉郡の首長墓系列は、摩湯山古墳・**黄金塚古墳**・**丸笠山古墳**・**貝塚丸山古墳**と考えられるが、それらが突然出現・形成されるのではなく、小地域内での展開が濃厚に考えられそうである。その中で、和泉もまた連合政権的性格を持っていたのであろう。

牛滝川左岸の岡山丘陵の久米田山台地にも、摩湯山古墳より遅れて出現する全長135mを測る前方後円墳の**貝吹山古墳**や、帆立貝式の前方後円墳である**風吹山古墳**をはじめ前方後円墳2基・円墳12基など、15基以上（現存8基）で構成され、後期まで比較的安定した造墓活動が続ける**久米田古墳群**がある。

しかし、**百舌鳥古墳群**に代表されるようにヤマト政権の勢力が和泉へ進出し、和泉地域も牛滝谷周辺では中期以後、その下部機構に組み入れられていったと思われる。

また、摩湯山古墳の出現の一方では、**三田遺跡C地区**で検出された布留式期の土壇墓群（160基以上）の存在があることにも注目しておくべきだろう。

和泉では、家父長制世帯共同体の群集墳は、顕著ではない。また、その数も極めて少ない。和泉最大の**信太（千塚）古墳群**でも85基であり、池田谷の**三林古墳群**15基、**黒石古墳群**3基、散在して**唐国・池田山の古墳群**、**寺門古墳群**などがあるが、主体部は竪穴式小石室や木棺直葬、組合せ式箱型石棺、埴輪円筒棺、河原石積みの小横穴式石室などである。ごく小数の有力古墳だけが花崗岩を使った横穴式石室を採用しているにすぎない。最大の**黒石1号墳**でも、石室全長9mを測る程度であり、板石を袖部の両側に立てる両袖式の横穴式室である**聖神社1号墳**では、玄室長約3.5m・幅約2.1mを測る。

聖神社1号墳の石室の玄門構造や幾つかの古墳で、紀ノ川流域の結晶片岩を箱形石棺材として用いるなど、和泉の古墳の中に紀伊地方との共通性も指摘できる。

また、和泉では横穴式木槨や木心粘土槨といわれる窯槨墳、いわゆる「カマド塚」の展開もある。

牛滝谷周辺では、古墳時代中期後半から後期になると、東山丘陵や岡山丘陵に中・小古墳が数基単位で築造される程度である。東山丘陵には、**三田古墳・東山古墳・儀平塚古墳・南ノ坊古墳**と単独墳が展開している。内容はよく解らないが、中期末から後期の中型墳であろう。**岡山古墳群**は実体がよく解っておらず、木棺直葬と簡単な横穴式石室で構成されていると考えられ、数単位群で構成された初期群集墳を含んでいる可能性がある。

古く遡る群集墳は、貝塚・地蔵堂の地域や海岸寺山で徐々に検出された。海岸寺山古墳群では、昭和48年の大阪府教育委員会の調査で2基の方墳が確認され、直弧文を施した異形の朝顔形埴輪が検出されている。今後も古墳の増加が期待され、「既に地上に姿を見せない古墳群」の存在を指摘できる。

今回の調査で、**三田遺跡A地区**から小規模な円墳1基・方墳2基が、また**山直北遺跡**では円墳1基が検出された。**春木八幡山遺跡**検出の小竪穴式石室を主体とする小古墳3基は、砂丘上でも数単位群の展開があることを示唆している。津田川流域には、天神山丘陵の**天神山古墳群**や**半田古墳群**がある。

この地域の希薄な分布を見せる古墳群も、地域首長の下にありながらも、次第に力をつけてきた有力な家父長の墳墓と考えられる。地上から姿を消していた三田の円墳・方墳群は三田集落の族長の墳墓の可能性もある。

このような性格を持った中期から後期にかけての集落の検出が、牛滝谷周辺でも増加している。**万町北遺跡・畑遺跡**に加え、**二俣池北遺跡**や**上フジ遺跡・山直北遺跡・三田遺跡B地区**などで、造り付けのカマドを持つ多数の竪穴住居群や掘立柱の建物跡として検出され

てきた。従来、和泉では**大園遺跡**に代表されるように、5世紀後半には竪穴住居が終焉を  
つげ、掘立柱の高床式住居に移行すると言われてきたが、周辺地域では造り付けカマドを  
伴った竪穴住居が6世紀末まで伝統的に営まれている。その集落のあり方は、牛滝谷で点々  
と展開を見せている。これらの住居は、時間的結果として密集しているが、浅谷を挟んだ  
微高地上に散村的に形成されている色彩が強い。これらは、住居構造の上において、先頃  
調査が行われた貝塚市**畠中遺跡**などの住居とはその様相を異にしており、同じ地域におい  
ても海岸平野部と各谷筋との集落の比較検討が必要となろう。一方、海岸平野部の**大園遺  
跡**では、5世紀後葉から6世紀末の掘立柱建物跡164棟以上が確認されており、掘立柱建物  
のみによって構成される集落である。集落は、屋3～4棟・倉1～2棟に溝を巡らして方  
形の屋敷地とし、浅い開積谷を挟んだ8ヶ所の小規模な共同体によって構成されているこ  
とが指摘されている。明らかに、周辺部は小地域をより濃く形成しているのである。

また、**三田遺跡**では連綿とした集落構成のなかで、6世紀後半に掘立柱建物の集落構成  
に移行する様である。さらに6世紀後葉から7世紀初頭には、方形柱掘方の2×3・2×  
2間や3×3間の建物が溝で囲まれ、整然と配置されている。総柱の建物は6棟確認でき  
る。柱の掘方は円形から一辺50cmの方形へと移行し、集落の拡大は6世紀後半から末にあ  
る。この時期には、地形に合わせるのではなしに、明らかに谷全体を意識して整地地割り  
を行っている。

今後、古墳研究と集落研究とをどの様に噛み合わせていくかが1つの課題となろう。

韓半島から伝播した須恵器の技術は、泉州北部で5世紀から9世紀の登り窯1000基のい  
わゆる「陶邑古墳窯跡群」として、泉北丘陵の東西15km・南北9kmにわたって、その一大  
生産地の成立を見る。

5世紀後半から6世紀には、牛滝谷北の槇尾谷筋の**谷山池支群**などで窯が群集形成  
されているが、6世紀後半になると**合池窯跡**や**海岸寺山窯跡**などのように、陶邑の一大窯  
跡群からはなれ、数基単位で窯が分布成立していることも特徴として指摘できる。**久米田  
池内須恵器窯**は、内容はよく解らないものの、これらと同じ性格のものである可能性があ  
る。

泉州地域のもう一つの特徴として、海に依存する生産が顕著であることが挙げられる。  
集落遺跡からは、蛸壺形土器や製塩土器が出土する。これらは、海岸平野部と内陸部とで  
は量の差こそあるが、かなり内陸部でも検出される。それは、農業のみに基盤をおいた生  
業ではなしに、季節的漁業・製塩の生業も営んでいたことを暗示している。しかし、

専業生産集団としての分化などは解らない。そこには、もっと国家的な編成があったのであろう事が想像される。

**奈良時代**は、東アジア的な情勢の変化のもとにあつて国家的指導の中、国力増強・行政組織の確立・税制・法令などの整備、いわゆる「律令国家体制」が完成した時代である。

和泉国は、他の畿内の諸国より遅れて、霊亀2（716）年に河内国から和泉・日根両郡を割いて「珍努宮」に供し、大鳥・和泉・日根の三郡によって「和泉監」（離宮特別行政区）を設けることで分離されたが、天平12（740）年の和泉監廃止により、河内国に併合された後、天平宝字元（757）年に再び分立・独立して一国を成している。しかし、国府や郡衙の正確な位置や内容は、未だ定かになっていないのが現状である。『和名類聚抄』によると、和泉郡には10の郷が見られ、三田遺跡周辺は和泉郡山直郷に含まれている。

和泉国は、国の成立は遅かったが、有力氏族の勢力を背景として移入された文化が、21ヶ所の古代仏教寺院の建立という形で現れてくる。岸和田市域における最古の寺院には、奈良時代前期、もしくは飛鳥時代にまで遡る可能性をもった八木郷の**小松里廃寺**や木嶋郷の**春木廃寺**がある。その後、奈良時代、特に7世紀後半から8世紀の白鳳期に、和泉郡に集中（13ヶ所）して建立されている。山直郷には、やはり奈良時代創建と見られる**田治米廃寺**があり、掃守郷には**別所廃寺**や**後堂浦廃寺**が創建されたと思われる。これらの瓦当文の系譜が、大和の官寺・私寺に求められることは、中央官寺の造営技術が貸し出されたことを物語っている。しかし、中には同型・同版の物ではない垂流型式の物を含むことは、和泉の地域色を示している。

槇尾川流域では、**和泉寺**・**坂本寺**・**池田寺**・**安楽寺**など一郷一寺の様子が明らかとなっており、牛滝谷流域でも同じ事が言えそうである。

和泉市国分の安楽寺は、承和6（839）年に至つて**和泉国国分寺**となっている。

また、池田寺は氏族名と寺名とが一致し、その有力集団の高揚と下降の二つの姿が指摘されている。8世紀前半に集落を構成した集団が、後半には寺を建立、さらに9世紀には寺が荒廃するのと同時に居住集団が移動しているという。

和泉には、切り石造りの後期・終末期古墳が存在しない理由の1つとして、大和・河内地域のように古墳と寺院との関係が密接でない事が指摘でき、突然奈良朝寺院の成立をみる。これは、氏族が突然出現した事に他ならず、国家的な政策による氏族の移動が行われたとも解釈でき、寺院の一郷一寺的な成立は、それを物語っているのかもしれない。

また、『延喜式』に見られる。いわゆる「延喜式内社」も各郷毎に存在する。山直郷に

は、**淡路神社**（摩湯町）・**楠本神社**（包近町）・**積川神社**（山直中町）・**山直神社**（内畑町）の四座が見える。このように当時の有力氏族の勢力を推測させる資料は断片的に得られるが、当時の生活跡を直接物語る資料はまだ少ない。

三田遺跡周辺の**三田遺跡C地区**の北端から**山直北遺跡**にかけて広がる建物群や、**上フジ遺跡**・**芝ノ垣外遺跡**の奈良時代後期を中心とする豊富な遺構は、社会の動き、国家権力による地域整備を基盤とした和泉国の急速な成立と開発を象徴しているようであり、今後、和泉国の成立と開発の問題を考えていく上で一つの問題点となろう。奈良時代後期から平安時代の掘立柱建物群が、三田遺跡C地区で10棟以上、また山直北遺跡でも、北・南・中央の三群に8世紀後半の建物群が展開しており、集落を画した溝などとともに検出されている。山直北遺跡の中央地区で溝を巡らす南北棟の掘立柱建物が5×2間・2×3間など6棟以上・3列の柵・柱掘形が一辺1mもある建物やそれらに伴うケズリカケ（イワイグシ）を出土した木組の井戸・土坑等の遺構がまとめて検出されている。また、北地区では、大形掘立柱建設跡群や緑釉陶器・灰釉香炉や鉄鉢形須恵器などの出土をみている。一般集落（農村）に存在しえない遺物から、在庁官人・地方官人の屋敷と想定されている。

**山直中遺跡**（丸柄）・**西大路遺跡**（巡方）や**万町北遺跡**（鉸具）で石製袴帯が出土している。官人達の所有したものであろう。また、彼らの古墓と推定される河合町の**河合古墓**では、銀装の帯金具が採集されている。

**蓮光寺遺跡**の芝ノ垣外地区からは、奈良時代後期の溝が検出された。幅1.4m・深さ1.1mの溝（7-OS）は、内側にN-15°-Eの方位をとる柵列を伴っており、平城宮IV～V様式の須恵器や土師器が一括して検出されている。これらの須恵器と土師器の割合は平城宮では須恵器1に対して土師器5の比率であるが、芝ノ垣外では1：1であることが指摘されている。土器は、ハケメ口縁ナデに地域色が認められることが報告された。

溝の方向・選地等から、山直郷の郡衙が周辺にひろがっていることが想定できる。この他に断片的ではあるが、**小松里廃寺遺跡**からは8世紀前半の遺物と共に溝・井戸が、**畑遺跡**からは掘立柱建物が、**栄ノ池遺跡**からは平安前期から中期にかけての4群の集落構成の建物が検出されている。また、**吉井一之坪遺跡**からは、須恵器A類に「家」の墨書土器が出土している。**万町北遺跡**では、平安中期の集落が知られる。

和泉郡の奈良時代確認遺跡は国府や寺院以外に12遺跡程である。土地と人は、中央から派遣された国司によって統括開発されて行ったと解釈されよう。

律令体制の矛盾の中で、民衆をとらえて登場してくるのが堺・家原出身の行基である。

久米田池・鶴田池などの池溝掘削や灌漑整備が、行基伝承などの文献に多々見られることは、山直谷周辺の開発とは無関係ではない。それぞれ**降池院**や**鶴田池院**を設け、宗教道場イコール開発の拠点となったのであろう。和泉桑原の出である僧・重源の谷山池、梨谷池の掘削伝承もこうしたものと同じであろう。

また天平19(747)年、『法隆寺流記資材帳』に法隆寺莊園・軽部池の名が見える。これにより、山直谷の開発には中央の寺院も関わっていたことが想像される。

条里制の問題は、現存する地割から山直条里が復原されているが、奈良・平安の溝や遺構の方向とは一致しない。それらは、中世以降の耕作溝に一致しているという結果が各調査遺跡から報告されている。今後、和泉郡の条里の起源をめぐっての検討課題も多い。

律令形成期の奈良時代創建の寺院群は、こうした集落と消長をほぼ同じくしており、奈良時代末から平安時代初期に早くも荒廃している。

律令体制が崩れる一方で、中世寺院の萌芽と合わせ莊園制が広がってくるなかで、12世紀から13・14世紀にかけて、再び段丘面の開発が大規模に行われたと考えられる。調査各遺跡の灰褐色系の整地層の耕作跡はその時代に遡るものが多い。

現在残る条里地割が行われ、段丘面が平坦地化してくるのは、この頃の大規模な開発の結果によるものが多いと思われる。またこの事は、重文『久米田寺文書』の中で、久米田池の改修や荒地に対する所領の確認が行われているように、荒廃した土地に対する再開発に**久米田寺**が乗り出したことをも示している。

**平安時代以降**、役小角にまつわる山岳仏教修験道の山として、**神光寺**や**松尾寺**・牛滝山ないうたき**大威徳寺**があり、先述した諸寺院は、朝廷の保護の下多数の莊園を所有し、密教文化を開花させた。これらは、葛城山・金峰山・大峰山・熊野と共に葛嶺二十八宿の一連の修験道の霊場としても今日も信仰を集めている。空海も二度榎尾山に登っている事が文献にみえる。**榎尾山**では、昭和37年、墳丘をもった平安末の10基の**経塚群**が発掘され、経文・鏡・青白磁・ガラス容器・古銭・刀子などを出土している。また、神仏習合の影響で華嚴經のボダラク(観世菩薩浄土)の思想の浸透とともに熊野詣が盛んとなる。和泉地域はこれらの道筋にあたっており、「王寺」が設けられた。

山直の積川神社の室町期の社殿や、寛治4(1090)年、銘のある「神号肩額」、鎌倉初期では、久米田寺仁王経曼荼羅や大威徳寺の多宝塔もこの時代から受け継がれた断片的な文化財で、当時の寺の繁栄を物語っている。

全国的傾向でもあるが、和泉地域でも11世紀から12世紀にかけて多くの古代末から中世

寺院の部分的な再建・建立を見ている。瓦を出土する遺跡は、総数50ヶ所を数え、大部分は平安時代創建のものである。牛滝谷周辺では、平安時代に**武庫廃寺・犬飼堂廃寺・今木廃寺・堂浦廃寺・神於寺・春木廃寺・天神山廃寺**などが建てられている。これらは、中央の氏族・社寺の荘園を背景として在地有力者たちが寄進建立したものであり、古代以来の民衆の信仰を通じて、支配関係を結び付ける政策の一つとも見ることができる。これらの大半は廃寺となっているが、出土する瓦当文様は多種にわたる。近年は、周辺遺跡から同型・同版瓦の出土が増加している。特に宝塔文や仏像文を配したものが目だっている。平安後期の建立とされる犬飼堂廃寺からは、昭和49年の岸和田遺跡調査会の調査で、平安後期から鎌倉期のロストル式の瓦窯2基が見つかったものの、これらの多数の瓦の系統だった研究はまだ進んでおらず、生産・流通の問題や技術者集団の動向などの検討が今後の課題となろう。

平安末から鎌倉にかけての集落跡は、**三田C地区**で浅い方形の溝に囲まれた建物が良好な状態で検出されている。

鎌倉から室町時代の掘立柱建物跡も各地で検出されてきており、山直線関係の調査遺跡では、**上フジ遺跡・三田遺跡B地区・山直北遺跡・今木遺跡**や、**山直中遺跡**などで発掘されている。

また、12世紀末から14世紀にかけての環濠を伴ったいわゆる「環濠屋敷跡」も、**和気遺跡**をはじめ**西大路遺跡・山直中遺跡**で検出されている。これらは、中世有力農民の名主層の屋敷地ではないかと考えられる。さらに、彼らは荘園制の崩壊と同時に、荘園領主から自立した有力名主層であったり、或は悪党と呼ばれた「初期武装集団」である。また彼らは、土豪の一翼を担った有力構成員であった可能性が高い。防衛的機能を持つ城郭へと発展する初期の姿であるようで、まさに荘園制が崩壊し、郷村制が出現してくる時期にあたる。即ち、防衛的屋敷地と考えることができる。この屋敷地の面積は、大きいものは1町以上を単位としているようで、文献に記載された1反という面積より広大であり、今後の検討課題となる。

**箕土路遺跡**では、室町期の掘立柱建物や井戸が多数検出され、14・15世紀の集落の構造の一部が明らかになってきた。この内、井戸の構造に大きな変化が認められ、曲げ物や羽釜の井戸に変わって石組井戸が主流を占め、確固たるものとなってくることが伺える。

またこれと同時に15世紀にはいると、和泉地域全域で瓦器はなくなり、かわって瓦質土器が出現してくるなど、器のあり方自体大きく変化していることも指摘できる。

室町時代末期には、岡山丘陵に**岡山御坊**が建立され、岡山は寺内町を形成、貝塚の寺内町と共に一向衆徒の拠点となったと言われる。16世紀初頭の文亀2（1502）年には門徒が集結し、戦国武将に立ち向かっている。

これらの中世都市の検出・復原も牛滝谷の歴史にとって重要な課題である。

また、和泉では正平24（1369）年の銘を持つ男里・**光平寺**の五輪塔や貞観4（1348）年銘の**孝恩寺**・正平21（1366）年銘の岬・**興善寺**などの大形五輪塔が著名であるが、和泉各地で野積みされている無縁塔婆にも注意する必要があるだろう。これらは、近年では荒廃も激しく、考古学を含めた学問的研究作業が立ち後れた分野である。和泉地域全域には、地元泉南産の和泉砂岩製の一石五輪塔・舟形光背の板碑などが広く分布している。牛滝谷の**山直墓地**や**三田墓地**では、室町後期から江戸時代にかけての年号を持つ一石五輪塔などの塔婆が、数百単位で存在している。民衆の墓所として長い間利用され続けており、この地域の歴史の深さや信仰の厚さを物語っている。

天正年間に、紀州根来寺の衆徒や本願寺の後ろだてとなる雑賀門徒に備え、秀吉が岸和田に中村氏を置いたのが**岸和田城下**形成の始まりとされている。岸和田の地は、その後も政治・軍事・交通の拠点として重要な役割を果たしてきた。小松・松平の後、明治維新まで岡部氏が13代在城し、農村・漁村一体の城下が形成された。岸和田藩は石高5300石の小藩だが、紀州の目付けとしての和泉国における位置は重要であった。

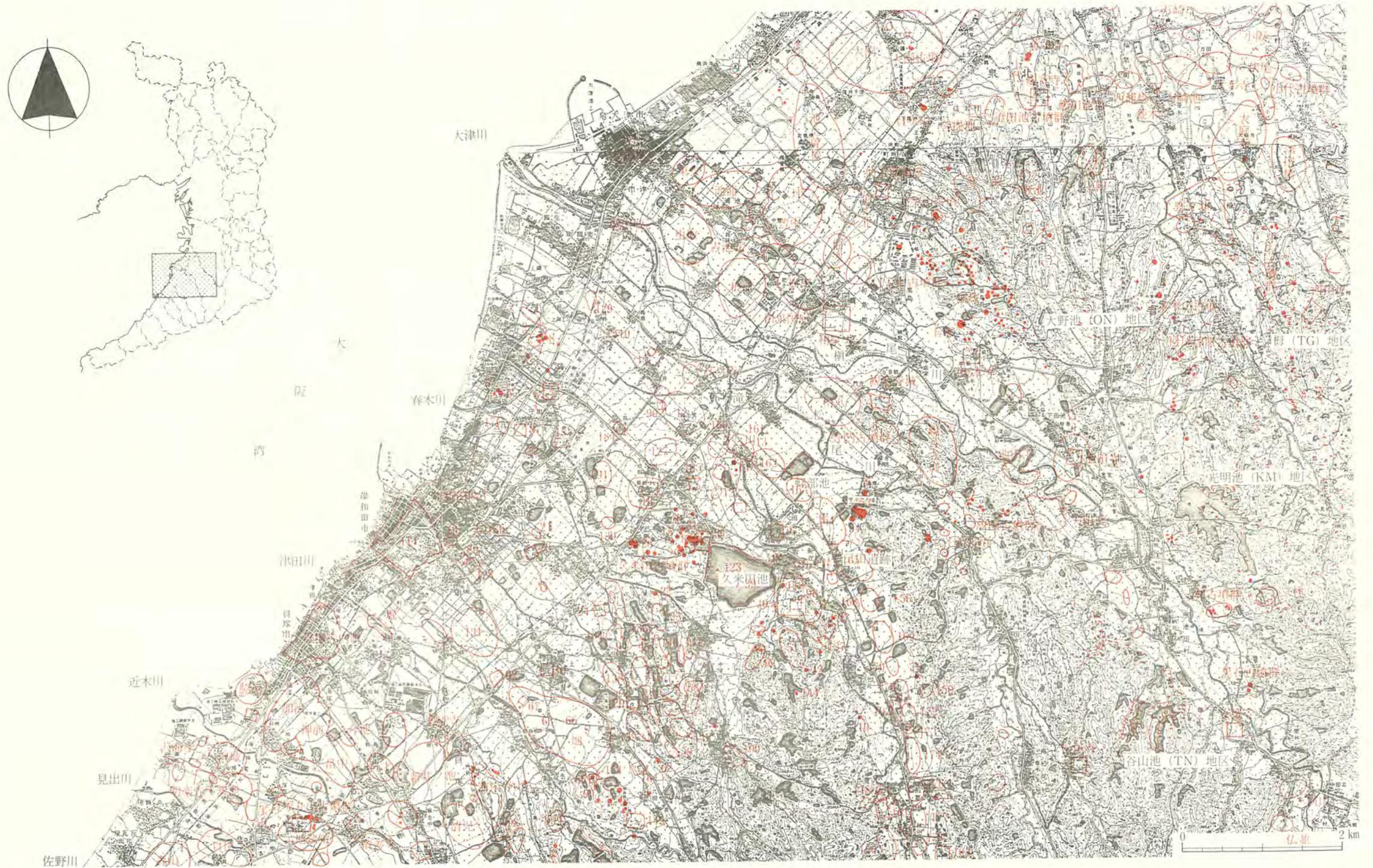
元禄の頃、五穀豊穰祭を機に始まったと言われる「だんじり祭（地車祭）」は、綿花を中心とする地場産業を背景に町民の経済的エネルギーに支えられ、近隣村々競いあって地車祭礼が活発化した。和泉における地車祭礼の中心として、今も浜手・山手共に息づいている。

近代にはいっても、綿花を素地に紡績業が大きく発展した。明治30年の**南海鉄道**の開通はそれに拍車をかけ、より一層泉州は発展した。近世・近代の水田耕作面の床土では、この綿花栽培の所産であろう小溝群が多数検出できる。

近年は、繊維を中心とする地場産業が発達したが「ガチャ萬」と唄われた好景気の後、産業の低下で泉州地域は以前の様には余り芳しくない。**関西新空港**に懸ける期待は大きい。

紹介した他にも、膨大な歴史資料がこれからも検出され続けるであろうが、これらの資料の研究は、ようやく端緒についたばかりである。総合的な歴史環境の復原が、今後必要になっていくであろう。

（田中一）



第6図 三田遺跡周辺遺跡群分布図 (約1/55,000)

第2表 岸和田市内遺跡群一覧

市町村 遺跡番号	遺跡名	種類	時代	摘要	
1	春木天の川遺跡	散布地	弥生・古墳	弥生土器・須恵器、土師器、埴輪	
2	春木八幡山遺跡	集落跡・古墳	縄紋中～晩、弥生前～後、古墳(後)奈良	住居跡? 縄紋土器、土錘、石鏃など石器類、弥生土器、小形小石室、	消滅
3	春木廃寺	寺院跡	奈良	山田寺式? 軒丸瓦	
4	春木廃寺瓦窯	瓦窯跡	平安		消滅
5	礼拝塚古墳	古墳	古墳	円墳?、須恵器・金環	消滅
6	牛神古墳	古墳	古墳	石棺?、	全壊
7	権現山古墳	古墳	古墳	円墳 径約30m 蓋形埴輪	消滅
8	八幡古墳	古墳	古墳	円墳 径約8.0~6.5m 高さ2m	半壊
9	吉井一え坪遺跡	跡	奈良	須恵器(墨書杯) 須恵質埴輪	
10	吉井上品寺	寺院跡	平安	瓦	全壊
11	夜疑廃寺	寺院跡	平安	瓦	
12	箕土路遺跡	集落跡	縄紋中・弥生前、室町	縄紋土器、弥生土器、掘立柱建物、井戸、瓦器・瓦質土器・土師器、	※協会報告書参照
13	今木廃寺	寺院跡	平安	園地、瓦・須恵器・土師器	
14	丸山古墳	古墳	古墳	円墳?、須恵器	全壊
15	長坂古墳	古墳	古墳	円墳 径11m 高1.5m	ほぼ全壊
16	小松里廃寺	寺院跡	奈良	軒平瓦・軒丸瓦、鷗尾片	
17	加守三味山遺跡	散布地	縄紋・弥生	弥生土器、石槍・石匙・大形石庖丁	
18	兵主廃寺	寺院跡	平安	瓦、国重文本殿あり	
19	宮本町遺跡	散布地	先土器	石器	
20	別所廃寺	寺院跡	奈良後・平安中、後	瓦、藤原宮式	全壊
21	別所熊野町遺跡	散布地	弥生	石匙	
22	下松孤塚古墳	古墳	古墳	円墳 径12m 高2m、須恵器	
23	孤塚遺跡	散布地	弥生	石鏃(黒曜石製など)	
24	武蓮廃寺	寺院跡	平安	瓦	
25	上松孤塚古墳	古墳	古墳	円墳? 高1m、竪穴式小石室 全長7.3m、巾0.35m	
26	浄行寺古墳	古墳	古墳	円墳 径16m、周濠、葺石、勾玉、管玉	半壊
27	志阿弥法師塚古墳	古墳	古墳	円墳 径30m、伝車輪石、石削	
28	女郎塚古墳	古墳	古墳	円墳 径30m、段築、周濠、埴輪列	半壊
29	風吹山古墳	古墳	古墳	帆立貝式前方後円墳 径50m、段築、剣・大刀・石突、円筒埴輪	
30	無名塚古墳	古墳	古墳	円墳 径10m以上、横穴式石室?	
31	貝吹山古墳	古墳	古墳	前方後円墳 全長135m、後円部径82m、三段築成、周濠、円筒埴輪、礫床、粘土柳?、管玉、鉄片	
32	光明塚古墳	古墳	古墳	円墳 径30m、現久米田墓地	半壊
33	池尻古墳	古墳	古墳	円墳	消滅
34	久米田遺跡	寺院跡	平安前後～現代	瓦、骨壺、古銭(星宋通宝など)、重文久米田文書	
35	池尻町遺跡	散布地	弥生	弥生土器、石斧、石鏃、須恵器	
(36)	田治米菅原遺跡	散布地	弥生中～後	菅原神社境内地内、田治米宮内遺跡に併合	)
37	田治米廃寺	寺院跡	奈良	軒平瓦	
38	田治米宮内遺跡	集落跡	弥生前～後、古墳	住居跡?、溝、弥生土器、須恵器、土師器、土錘、石鏃、砥石など	
39	久米田池内須恵器窯	窯跡	? 古墳	須恵器	全壊
40	松尾池尻埴輪窯	窯跡	古墳	須恵質埴輪、須恵器	消滅
41	西山古墳	古墳	古墳	円墳?、須恵質埴輪、須恵器	
42	お立場古墳	古墳	古墳	小石室?、箱型石棺、不明鉄剣、須恵器	消滅
43	馬塚古墳	古墳	古墳	円墳、石室?、馬具、伝鉄剣、須恵器	消滅
44	小金塚古墳	古墳	古墳	円墳	半壊
45	重ノ原古墳	古墳	古墳	円墳?、横穴式石室(両袖)全長3.4m、玄室2.2m、巾1.75m、鉄刀、須恵器	消滅
46	赤山古墳	群墳	古墳	円墳群、竪穴式小石室、箱型石棺、須恵器、鉄鏃、刀子	
(47)	西山遺跡	散布地	先土器、縄紋	ナイフ形石器、石鏃、石匙	)
48	岡山矢取遺跡	集落跡	弥生	住居跡?、弥生土器	
49	重ノ原遺跡	散布地	古墳	溝、土師器、須恵器	全壊
50	岡山八ッ川遺跡	散布地	弥生	弥生土器・須恵器・瓦器	全壊
51	どぞく遺跡	集落跡	弥生中～後	竪穴住居群、弥生土器、石鏃	
52	児池東遺跡	集落跡	弥生	竪穴住居跡、弥生土器、土錘、石鏃	
53	摩湯山古墳	古墳	古墳	前方後円墳 全長約200m、後円部径120m、竪穴式石室?、踏付円筒・埴輪、土師器高杯	昭31国史跡
54	馬子塚古墳	古墳	古墳	方墳、二段築 径20m、粘土柳?、半三角緑二神二獣鏡、管玉15、形象埴輪	全壊
55	東山古墳	古墳	古墳	円墳? 径約20m 須恵器・土師器	
56	三田古墳	古墳	古墳	円墳 径約10m、木棺直葬?、須恵器、円筒埴輪	
57	たな川古墳	古墳	古墳	円墳? 横穴式石室?	

市町村 遺跡番号	遺 跡 名	種 類	時 代	摘 要
58	琴山遺跡	散布	縄文・平安	石鏃、須恵器・土師器
59	三本山下遺跡	散布	古墳～室町	須恵器、陶器、石鏃
60	神明山古墳	古墳	奈良	円墳？、伝刀剣
61	堂ノ後廃寺	寺院	後	瓦
62	三合塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳？
63	畑(町)遺跡	集落	先土	方形周溝墓群、住居跡群(弥生・古墳) 弥生土器、須恵器、土師器、石器類
(64)	どんど遺跡	集落	弥生・中	住居跡、弥生土器、畑遺跡に併合
(65)	岸ノ上遺跡	集落	弥生・中	住居跡、弥生土器、
(66)	中島遺跡	集落	弥生・中	住居跡、石包丁
67	堂浦廃寺	寺院	平安・後	瓦、須恵器、土師器、弥生土器、不定形刃器
68	天神山廃寺	寺院	平安・後	瓦
69	天神山古墳	古墳	古墳	円墳？、弥生土器散布、石包丁
70	牛神塚古墳	古墳	古墳	円墳、須恵器
71	流木銅鐸出土	古土	弥生・後	袈裟禪文銅鐸(京都国立博) 器高31.6cm
72	福塚古墳	古墳	古墳	円墳 径約38m
73	流木丸山古墳	古墳	古墳	須恵器
74	大山大塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳全長50m 銀環、「捕鳥部万之墓」の碑あり
75	義犬塚古墳	古墳	古墳	円墳 径約22.0～19.0m 高さ4.5m
76	矢代寸廃寺	寺院	平安・中	瓦
77	尾崎遺跡	散布	弥生	石鏃
78	儀平山古墳	古墳	古墳・後	円墳・横穴式石室？、須恵器器台
79	南ノ坊古墳	古墳	古墳	円墳 径30m、周辺に馬塚・高塚地名あり
80	積川廃寺	寺院	平安？～	式内積川神社重文本殿あり
81	神於寺跡	寺院	平安	瓦、滑石製鍋
82	神於銅鐸出土	古土	弥生	流水文銅鐸(京都大)、器高42.95cm
83	河合古墓	古墳	古墳	円墳 径約10m、箱型石棺、帯金具8、玉破片1
84	経塚古墳	古墳	古墳・後	円墳 径12m、高さ2.5m(伝光忍上塚)
85	葛城山頂遺跡	散布	先土器、縄文・中	国府型ナイフ・縄文土器、石鏃、石錐等
86	円筒棺出土	古土	古墳・後	埴輪円筒棺(久米田中学保管)
87	来迎寺跡	寺院	平安・後	瓦
88	穴口廃寺	寺院	奈良	瓦
89	岸和田古城跡	城跡	室町	土壇
90	犬飼堂廃寺	寺院	平安・後	瓦、ロストル式瓦竪2基
91	栄の池遺跡	集落	弥生～古墳	住居跡群(弥生・奈良)、方形周溝墓、須恵器、石器、縄文石棒、木製品農耕具
92	今城跡	城跡	室町	(秀吉)
93	イナリ古墳	古墳	古墳	円墳 径約18m
94	合池窯跡	窯跡	古墳	須恵器
95	道ノ池窯跡	窯跡	弥生・古墳	弥生土器片、須恵器
96	岡山御坊跡	寺院	室町	瓦、陶磁器
97	楠本神社古墳	古墳	古墳・後	小石室、須恵器
98	槍ヶ谷城跡	集落	室町	消滅(秀吉)
99	落合城跡	集落	室町	消滅(秀吉)
100	福田城跡	城跡	室町	
101	稲葉城跡	集落	室町	
102	土居城跡	集落	室町	
103	堂ヶ峰廃寺	寺院	鎌倉	瓦、経石
104	山直神社遺跡	寺院	鎌倉	瓦、瓦器・陶器
105	河合城跡	城跡	室町	
106	内畑城跡	城跡	室町	掘切、馬出し
107	大沢城跡	城跡	室町	掘切、馬出し
108	岡堂跡	寺院	鎌倉	瓦、瓦器
(109)	大師淵遺跡	散布	弥生・後	弥生土器片
110	大石(玉)塚古墳	古墳	古墳	全壊
111	神福寺跡	寺院	鎌倉	瓦
112	転法輪寺跡	寺院	鎌倉	瓦
113	勝福寺跡	寺院	鎌倉	瓦
114	岸和田城跡	城跡	室町～江戸	石垣作、濠、瓦
115	高山古墳	古墳	古墳	円墳、須恵器
116	高神ノ木山遺跡	古墳	古墳	須恵器片
117	今木城跡	城跡	室町	伝菊屋敷、須恵器・土師器
118	岡山狐塚古墳	古墳	古墳	円墳？ 竪穴式小石室
119	行合(観音)堂	寺院	鎌倉	全壊

市町村 遺跡番号	遺跡名	種類	時代	摘要
120	泉光寺	寺院跡	江戸	旧陣屋跡
121	古銭出土	出土	室町	陶器甕入古銭
122	大町遺跡	散布地	弥生	弥生土器
123	久米田池内遺跡	散布地	奈良～鎌倉	須恵器、瓦器
124	大威徳寺跡	寺院跡	鎌倉室町～現代	瓦、重文多宝塔
125	仏谷尾遺跡	散布地	縄文	石鏃
126	沼天神社遺跡	寺院跡	室町	須恵器、瓦器、瓦
127	下池田遺跡	集落跡	弥生～古墳	竪穴住居群、円形周溝墓群、弥生土器、土師器、須恵器、石器類、製塩土器
128	小寺遺跡	散布地	古墳	須恵器、土師器、蜻壺
129	磯之上遺跡	散布地	古墳	須恵器、土師器
130	額原遺跡	散布地	弥生・古墳	掘立柱建物群・周溝遺構、須恵器、土師器、石鏃
131	土生遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居、石鏃、扁平片刃石斧、須恵器、土師器、製塩土器
132	上松三味遺跡	散布地・墓地	平安、室町～江戸	須恵器、石塔婆40基以上
(133)	三味遺跡	散布地	平安	須恵器、上松三味遺跡に併合
134	合池遺跡	集落跡	弥生～室町	弥生土器、須恵器、土師器、中世陶器
135	上松遺跡	集落跡	弥生・室町	弥生土器、中世墓地
(136)	岡山遺跡	散布地	古墳～室町	須恵器、土師器、土釜
137	三田墓地	墓地	江戸	墓碑(位碑状、六柱状) 一石五輪塔など
138	板橋遺跡	集落跡	奈良～江戸	須恵器、陶器
139	壹山遺跡	散布地	縄文～室町	石鏃、須恵器、陶器
140	唐池遺跡	集落跡	古墳～室町	須恵器、陶器
141	笠松遺跡	集落跡	奈良～室町	須恵器、陶器
142	荒子(作)遺跡	散布地	縄文	石鏃
143	ビガ谷遺跡	集落跡	縄文～室町	石鏃、弥生土器、須恵器、土師器
144	箱谷古墳	古墳	古墳	古墳
145	向山古墳群(向山城跡)	古墳群	古墳・後室町?	三基の単位群、須恵器、紡錘車
146	蛇塚古墳	古墳	古墳?	古墳?
147	阿問ヶ滝墓地	墓地	室町～江戸	石塔婆約80基、一石五輪塔群
148	稲葉墓地	墓地	室町～現代	石塔婆約2700基
(149)	宮山遺跡	散布地	弥生	サヌカイト片
150	具足遺跡	散布地	弥生	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器
151	西方寺遺跡	寺院跡	室町	瓦
(152)	長光庵寺遺跡	寺院	平安	瓦(山直神社境内)
153	山直墓地	墓地	江戸	石塔婆約200基
(154)	二つ池遺跡	散布地	古墳	須恵器、土師器、瓦器、羽釜
(155)	鍋山城跡	城跡	室町?	室町?
156	半田遺跡	散布地	弥生～古墳	弥生土器、土師器、須恵器
157	上松中尾遺跡	集落跡	弥生後・古墳・中近世	竪穴住居跡・弥生土器、横穴式石室?、須恵器、土師器、中近世墓壇群
158	岡崎(半田)古墳群	古墳群	古墳・後室町	古墳・後室町
159	神於寺瓦窯跡	窯跡	平安・室町	瓦
160	西大路遺跡	集落跡	弥生～古墳	鎌倉 竪穴住居、方形周溝墓、旧河道、シガラミ、溝、鎌倉掘立柱建物、弥生土器、製塩土器、土師器、石帯、瓦器
161	今木遺跡	散布地	弥生・室町	掘立柱建物、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、今木庵寺あり
162	軽部池西遺跡	集落跡	縄文後・弥生後	縄文流路、縄文土器、弥生竪穴住居 ※協会報告書参照
163	山ノ内遺跡	集落跡	縄文後・弥生後～古墳	縄文風倒木群、弥生流路・大木株・サヌカイト・黒曜石製石鏃、竪穴住居、手あぶり形土器、弥生土器、土師器
164	山直北遺跡	集落跡・古墳	古墳～平安	円墳、竪穴住居(古墳後)、掘立柱建物群(奈良～平安)、風字硯、縁袖陶器、須恵器、土師器など
165	三田遺跡	集落跡・墓地	先土器、古墳前・後、奈良～鎌倉	土壇群(古墳前) 竪穴住居群(古墳後) 掘立柱建物群(古墳～平安)、古墳、有舌尖頭器、土師器、須恵器、黒色土器など
166	上フジ遺跡	集落群	古墳後・奈良～室町	竪穴住居(古墳後) 掘立柱建物(古墳後～奈良)、国府型ナイフ、須恵器、土師器、隆平永宝、瓦器
167	二俣池遺跡	集落生産跡	古墳～近世	竪穴住居、溝、須恵器、土師器、瓦器、周辺に中世土居城あり
168	水込遺跡	散布地	奈良・平安	掘立柱建物群(飛鳥)、溝、土師器、須恵器・瓦器
169	黒石遺跡	散布地	古墳～江戸	須恵器、陶磁器
170	山直中遺跡	集落生産跡	古墳～室町	掘立柱建物、瓦器、陶磁器、石帯(丸鞍) 字土居に平松居城
171	蓮華光寺跡	散布地	古墳～江戸	大光寺・堂塚寺院地名あり
172	芝ノ垣外遺跡	集落跡?	奈良後、室町	柵、溝(奈良後)、須恵器、土師器、瓦器 ※協会報告書参照
173	土井ノ木遺跡	散布地	室町	室町
174	中之社遺跡	散布地	弥生?	サヌカイト
175	宮の後遺跡	散布地	古墳～江戸	須恵器、陶磁器

## 註

- i 自然地形を中心とした地理的な環境、遺構・遺物の発掘資料に基づいた考古学的な歴史環境については、近刊されている報告書などで先学諸氏の一連の業績が蓄積されつつある。  
広瀬和雄ほか「和泉丘陵地区の環境」『和泉丘陵遺跡分布調査報告書－大阪府和泉市所在－』和泉丘陵遺跡分布状況調査会 1977  
石神怡・広瀬和雄・豊田兼典・松村隆文ほか「地理的環境」「歴史的環境」『和泉黒石1号墳石室実測調査報告』血沼2 和泉考古学研究会 1983  
石神怡「石津川流域の遺跡群とその立地条件」「まとめ－周辺遺跡との関連において－」『府道松原・泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(財大阪文化財センター 1984  
大野薫「泉北丘陵の地形的特徴と遺跡分布」「泉北丘陵を中心とした考古学的環境」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告Ⅱ－西浦橋遺跡－』(財大阪文化財センター 1984  
広瀬和雄「岸和田・貝塚市域周辺の遺跡群の動向」『畠中遺跡発掘調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会 1978  
広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6 岩波書店 1986  
など  
三田遺跡を語る場合、周辺の地形、遺跡群の動向と無関係では有り得ない。これらの方々の業績に導かれ、担当者としての立場に立って簡単に環境を記述しておきたい。
- ii 本章での遺跡周辺の地形分類図は、大阪府科学教育センター豊田兼典氏より提供を受け、第1節は田中が執筆した。第2節については、虎間と田中が協議して遺跡地名表を作成し、挿図類・文献目録などは、田中が事に当たった。
- iii 取り上げた遺跡の文献は本文中で(註)としてとりあげる事は割愛するが、以下岸和田市関係の埋蔵文化財の文献を時代順に分類して掲げておきたい。

Aは、江戸・明治期以来の地誌、Bは、明治期以来の岸和田に関わる論文・資料紹介・研究ノートなど、Cは、岸和田市刊行の文化財関係の紹介と文化財行政開始以前の報告書、Dは、市教育委員会・遺跡調査会調査の報告書及び概報類、Eは、大阪府教育委員会などの調査に懸かる概報及び資料の紹介、Fは、(財大阪府埋蔵文化財協会調査の報告書及び資料である。

なお、戦後の文献を遺跡ごとに分類したものに、協会報告書文献F10 駒井正明編「岸和田市域遺跡文献一覧」が先刊されている。参照されたい。

(田中一廣)

<岸和田市内関係埋蔵文化財文献抄>

- A 1 石橋直之編『泉州志』 元禄13年  
 2 並河誠所「和泉志」『五畿内志（日本輿地通志畿内部分）』 享保21年  
 3 『和泉郷土記』 元文4年冬  
 4 秋里籬島編『和泉名所図絵』 寛政8年  
 5 『泉州名所古迹誌』 文化元年  
 6 中盛 淋『かりそめのひとりごと（拾遺泉州志・加李素免草紙）』 文政2年  
 7 井上正雄編『大阪府全誌』 大阪府 大正11年11月  
 8 西山勝次郎『大阪府史跡名勝天然記念物 第四冊 岸和田市』 大阪府学務部 昭和6年3月  
 9 大阪府史蹟調査会編 「史蹟講演会並郷土史料展覧会岸和田会場記事」『大阪府史調査会報』2 大阪府 大正5年3月  
 10 大阪府史蹟調査会編 「泉南郡古墳」『大阪府史蹟調査会会報』4 大阪府 大正6年3月  
 11 梅原末治『大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査（其のI）』【久米田寺西方の古墳群・山直下村摩湯山古墳】 大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告3輯 大阪府 昭和7年3月  
 12 森 浩一ほか『大阪府史 第一巻』 大阪府 昭和15年3月  
 13 石部正志ほか『岸和田市史 第一巻』 岸和田市役所 昭和15年9月  
 14 竹内理三編 『大阪府地名大辞典』 角川日本地名大辞典27 角川書店 昭和15年10月  
 15 直木孝次郎・森杉夫編『大阪府の地名』 日本歴史地名大系28 平凡社 昭和16年2月
- B 1 考古学会「雑報 和泉国の銅鐸」『考古学会雑誌』第3篇第2号 明治43年2月  
 2 浜田耕作「一・二の銅鏡及び銅鐸の成分に就いて」『考古学雑誌』第8巻6号 大正8年6月  
 3 梅原末治「和泉発見の銅鐸」『神於銅鐸』銅鐸の研究』大岡山書店 昭和2年7月  
 4 藤澤一夫「摂河泉出土古瓦の研究－編年的様式分類の一試企－」【春木廃寺】『考古学評論』第3輯 東京考古学会 昭和16年6月  
 5 泉大津高校地歴部編「摩湯山古墳とその遺跡」『和泉考古学』第1集 泉大津高校地歴部 昭和29年3月  
 6 森 浩一「大阪府岸和田市摩湯町出土の古墳遺物」『古代学研究』26 昭和35年11月  
 7 堅田 直「大阪府八幡山遺跡調査概報」『先史学研究』4 昭和37年3月  
 8 玉谷 哲「大阪府岸和田市流木町発見の銅鐸」『古代文化』IX-2 昭和37年8月  
 9 石部正志ほか「和泉の古墳」大阪府立泉大津高校地歴部 昭和46年9月  
 10 森 浩一「岸和田市流木町の銅鐸」『古代学研究』68 昭和48年8月  
 11 広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向－地域における政治関係についての基礎的諸問題－」『大園遺跡発掘調査概要II』大阪府教育委員会 昭和50年3月  
 12 巽淳一郎「1978年考古学界の動向 古墳時代」【土生】『考古学ジャーナル』165 昭和15年5月  
 13 森 浩一「岸和田市久米田古墳群出土の石製品」『古代学研究』83 昭和52年6月  
 14 森 茂「古墳時代の泉州の漁撈について」『摂河泉文化資料』22 昭和15年7月  
 15 村上博史「栄ノ池遺跡の調査」『摂河泉文化資料』22 昭和15年7月  
 16 岩本正二「製塩土器の分布と流通」『考古学研究』106 昭和15年9月  
 17 玉谷 哲ほか『城郭大系（大阪・兵庫）』(株)新人物往来社 昭和15年3月

- 18藤澤一夫「和泉の古瓦」【小松里廃寺・別所廃寺】 熊取公民館文化財講座資料 昭和57年4月
- 19和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考－小林行雄博士古稀記念論文集－』 平凡社 昭和57年5月
- 20藤永正明「和泉郡の条里型地割に関する問題点」『大園遺跡発掘調査概要VII』大阪府教育委員会 昭和57年3月
- 21芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原・泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター 昭和59年3月
- 22広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6 昭和61年1月
- 23渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』3号 昭和61年3月
- C 1 岸和田市教育委員会編『郷土史教室』 岸和田市教育委員会 昭和32年9月
- 2 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田市の文化財I』 岸和田市役所 昭和33年3月
- 3 岸和田市教育委員会編『郷土史教室』 岸和田市教育委員会 昭和34年3月
- 4 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田市の文化財II』 岸和田市教育委員会 昭和41年12月
- 5 堅田 直ほか『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』帝塚山大学考古学研究報告第I輯 帝塚山大学考古学研究室【(財)古代学協会・岸和田市教育委員会】 昭和40年3月
- 6 石部正志・玉谷 哲『市内出土遺物図録－玉谷哲氏所蔵資料－』 岸和田市史紀要2号 岸和田市史編纂室 昭和51年3月
- 7 保存修景計画研究会編『岸和田の文化財を考える－これからの町づくりのために－』 岸和田市企画室 昭和52年3月
- 8 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田の文化財写真集I』 岸和田市教育委員会 昭和45年3月
- 9 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田の文化財写真集II－十輪寺岡部長著公墓移転記録－』 岸和田市教育委員会 昭和47年3月
- 10 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田の文化財写真集III－市内調査記録－』【神像仏像・牛滝山中井町不動・大沢町観音など】 岸和田市教育委員会 昭和49年3月
- 11 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田の文化財写真集IV－市内出土土器－』【春木八幡山・畑・下池田・栄の池】 岸和田市教育委員会 昭和55年3月
- 12 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田の文化財写真集V－市内出土瓦－』【天神山・堂浦・小松里・武庫・重の原・今木・犬飼堂・久米田寺・別所・神於寺ほか】 岸和田市教育委員会 昭和56年3月
- 13 岸和田市文化財専門委員会編『岸和田の文化財写真集VI－市内出土石器－』【畑・琴山・栄ノ池・下池田・加守三味山など】 岸和田市教育委員会 昭和58年3月
- D 1 近藤利由・酒井龍一ほか『土生遺跡第2次発掘調査概要』岸和田市遺跡調査会 昭和50年1月
- 2 近藤利由ほか『土生遺跡第3次発掘調査概要』岸和田市遺跡調査会 昭和50年3月
- 3 近藤利由・尾谷雅彦ほか『土生遺跡発掘調査概要』 岸和田市文化財調査概要1 岸和田市教育委員会 昭和51年3月
- 4 近藤利由『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要2 岸和田市教育委員会 昭和52年3月
- 5 土師春樹・近藤利由『土生遺跡発掘調査概要』 岸和田市文化財調査概要3 岸和田市教育委員会 昭和53年3月

- 6 近藤利由ほか『岸和田地区（仮称）埋蔵文化財分布調査報告書』岸和田遺跡調査会 昭和54年12月
  - 7 近藤利由ほか『栄の池遺跡』岸和田遺跡調査会 昭和54年3月
  - 8 土師春樹・近藤利由『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要4 岸和田市教育委員会 昭和54年3月
  - 9 土師春樹・忍 薫ほか『土生遺跡他発掘調査概要』【栄ノ池】 岸和田市文化財調査概要5 岸和田市教育委員会 昭和55年3月
  - 10 近藤利由ほか『土生遺跡他発掘調査概要』【畑・天神山3号・天神山廃寺】 岸和田市文化財調査概要6 岸和田市教育委員会 昭和56年3月
  - 11 忍 薫ほか『土生遺跡他発掘調査概要』【土生・壺山・天神山廃寺・堂浦廃寺】岸和田市文化財調査概要7 岸和田市教育委員会 昭和57年3月
  - 12 忍 薫ほか『昭和57年度発掘調査概要』【今木廃寺・畑・小松里廃寺】 岸和田市文化財調査概要8 岸和田市教育委員会 昭和58年3月
  - 13 近藤利由ほか『昭和58年度発掘調査概要』【小松里廃寺】 岸和田市文化財調査概要9 岸和田市教育委員会 昭和59年3月
  - 14 近藤利由ほか『昭和59年度発掘調査概要』 岸和田市文化財調査概要10 岸和田市教育委員会 昭和60年3月
  - 15 近藤利由ほか『昭和60年度発掘調査概要』【小松里廃寺・久米田寺・畑】 岸和田市文化財調査概要11 岸和田市教育委員会 昭和61年3月
  - 16 近藤利由「下池田遺跡発掘調査の概要」『第15回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』(勸大阪文化財センター 昭和61年12月)
  - 17 中村 浩・近藤利由ほか『下池田遺跡－第2次発掘調査報告－』 大谷女子大学資料館報告書第17冊 大谷女子大学資料館 【岸和田遺跡調査会・岸和田市教育委員会】 昭和62年3月
  - 18 近藤利由「畑遺跡（1次・50年 2次・57年）の調査」(勸大阪府埋蔵文化財協会 第2回泉州の遺跡展発表会資料 昭和62年3月)
- E 1 岡本一士・松井忠春ほか『泉南丘陵地区遺跡に関する分布調査報告書』元興寺仏教民俗資料研究所 大阪府企業局 昭和48年2月
- 2 大阪府立泉北考古資料館編『和泉地方の埋蔵文化財展』【下池田銅鍬・流木銅鐸・馬子塚鏡・沼田山須恵器・河合鍔帯】泉北考古資料館だより11 昭和55年11月
  - 3 大阪府立泉北考古資料館編「上松中尾遺跡－岸和田市上松町－」『最近発掘された和泉地方の大規模調査成果展』泉北考古資料館だより13 昭和57年6月
  - 4 野上丈助編 特別展『大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館図録第1冊 昭和57年2月
  - 5 堺市立博物館「和泉地方における瓦の系譜（試案）」【春木廃寺】『堺の遺跡と出土品』春期特別展図録 昭和60年4月
  - 6 岡本敏行ほか『今木廃寺発掘調査概要－岸和田市東大路町所在－』【付、箕土路・西大路・今木試掘調査】大阪府教育委員会 昭和60年3月
  - 7 小山田宏一『三田遺跡試掘調査概要－府道磯之上山直線建設に伴う試掘調査（概要）－』【付、磯之上山直線分布調査】大阪府教育委員会 昭和60年3月
  - 8 西村尋文『軽部池西遺跡試掘調査概要（報告書）II－府道磯之上山直線工事に伴う試掘調査－』大

- 阪府教育委員会 昭和60年3月
- 9 野上丈助編 特別展『大阪府の銅鐸図録』 大阪府立泉北考古資料館図録第3冊 昭和61年2月
- 10 文珠省三ほか 第107回特別展『泉南の文化財』 大阪市立博物館展覧会目録第104号 昭和62年4月
- F 1 井藤徹編『府道磯之上・山直線建設に伴う西大路遺跡・今木廃寺遺跡－発掘調査調査事業報告書－』  
 (勸大阪府埋蔵文化財協会調査事業報告第1冊 昭和60年12月)
- 2 展示会企画委員会編『泉州の遺跡－(勸大阪府埋蔵文化財協会昭和60年度発掘調査成果展－)【箕土路・西大路今木・軽部池西・三田A地区・B地区】 昭和60年2月
- 3 渡辺昌宏・渋谷高秀・田中一広『三田遺跡(三田の辻遺跡B地区)発掘調査』 現地説明会資料4  
 (勸大阪府埋蔵文化財協会 昭和61年3月)
- 4 渡辺昌宏・渋谷高秀・田中一広・虎間英喜「三田遺跡(三田の辻B地区)の調査」『第14回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』(勸大阪文化財センター 昭和61年6月)
- 5 渡辺昌宏・虎間英喜・森井貞雄『山ノ内遺跡(A地区)発掘調査』 現地説明会資料7 (勸大阪府埋蔵文化財協会 昭和61年12月)
- 6 小山田宏一・宮崎泰史「三田遺跡発掘調査中間資料」(勸大阪府埋蔵文化財協会 昭和61年12月)
- 7 展示会企画委員会編『第2回 泉州の遺跡－(勸大阪府埋蔵文化財協会昭和61年度発掘調査の成果展－)【西大路・山之内A・山之内B・山直北・三田C・上フジ・山直中・芝ノ垣外】 昭和62年2月
- 8 吉川義彦・西藤清秀・宮原晋一・豊岡卓之『山直北遺跡発掘調査』 現地説明会資料10 (勸大阪府埋蔵文化財協会 昭和62年2月)
- 9 高島徹・伊藤純・橋本高明・岡本武司・岡戸哲紀『西大路遺跡発掘調査』 現地説明会資料11 (勸大阪府埋蔵文化財協会 昭和62年3月)
- 10 宮野淳一・駒井正明『近畿自動車道と歌山線建設に伴う芝ノ垣外遺跡発掘調査報告書』(勸大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第8輯 昭和62年1月)
- 11 展示会企画委員会編『岸和田市「山直郷とその周辺」－府道磯之上山直線建設予定地の発掘調査中間報告－』(勸大阪府埋蔵文化財協会 昭和62年6月)
- 12 久米雅雄・小山田宏一・岡本武司『府道磯之上・山直線建設に伴う軽部池西遺跡発掘調査報告書』(勸大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第11輯 昭和62年3月)
- 13 高島徹・岡戸哲紀・西村歩・岡本武司『府道磯之上・山直線建設に伴う箕土路遺跡発掘調査報告書』(勸大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第13輯 昭和62年3月)

(87. 3. 31)

## 第Ⅲ章 調査方法

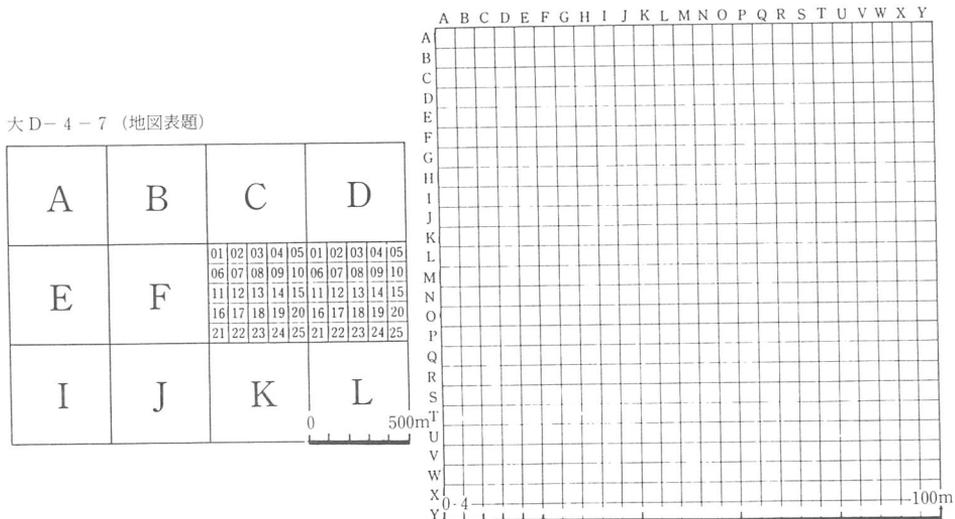
### 第1節 第1次調査

本調査は、擁壁工事の事前調査と遺跡内容の把握を目的とする試掘調査を兼ねるものであった。擁壁工事に係る関係上、調査トレンチは、路線建設予定地の東西両側に各々幅3mで設定することになった。総延長1,300m、調査面積3,900㎡を測る規模であった。調査区割は里道や水路等により分断されている現況に即し、小地区名を北よりAからHまでのアルファベットで付した。今回の調査区との対照は、C-2・3区東側=A区、C-2・3区西側=B区、C-4・5区東側=C区、C-4・5区西側=D区、B-2区東側=E区、B-2区西側=F区、B-3区東側=G区、B-3区西側=H区となる。

遺構実測および遺物の取り上げは、道路中央杭を基準に設定した5m区画を使用した。

### 第2節 第2・3次調査

以下に述べる第2次・第3次発掘調査（第2次調査は85年度に実施したA、B地区、第3次調査は86年度に実施したC、D地区を指す。）は、当協会が実施した。したがって本文



第7図 地区割の方法模式図

中で用いる地区名及びその他の記号について若干の説明をしておきたい。

調査では、表土の機械掘削終了後、調査区全体に新平面直角座標第VI座標系をもとに4×4mの最小区画を設定し、それぞれに名称をつけた。区画名のつけ方は、当協会の調査規程に基づき次の手順によって行った。

大阪府発行新版(昭和59年建設省国土地理院承認)の1/2500地形図に示された500m区画とその呼称を踏襲しA～Lの記号をつける。500m×500mの区画を25等分して100m×100mの区画をつくり01～25の二桁の数字で示す。100m×100mの区画は4mの方眼で625等分し二文字のアルファベットで示す(第7図参照)。

三田遺跡A地区、B地区、C地区、D地区の調査区のうち、本書で主に報じる部分は大D-4-6D-04・05・10、大D-4-7A-06・11・16・21・22、大D-4-7E-02・07、大D-4-10L-24の100m区画内に位置する。

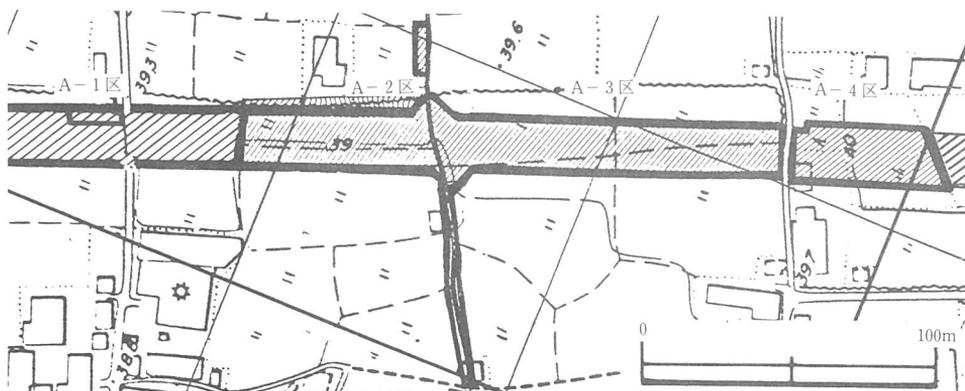
また、主に遺構説明の項で用いたA10-OR等の表記は、地区名(アルファベット=A～C地区)、遺構名(アラビア数字=10)と遺構の種類(アルファベット=OR)を示している。遺構の種類は本協会ですら定めた略号を用いた。なお本書に關係する略号の意味については、凡例を参照されたい。(小山田)

### 第1項 A地区

三田遺跡A地区の調査は、約3,600㎡を対象として行った。調査地区は、3本の市道及び里道によって4分割される。したがって、本書では、記述の都合上便宜的に北側から南側へ1～4区の区分けを用いた(第8図)。

1区は第1次調査の残り部分で、調査範囲が狭いためすべて人力掘削によって行った。

第2次調査は、A・B両地区が同時に調査を開始した。進入路がA地区北側の道路しか



第8図 A地区調査区配置図(1/2,500)

使用できなかったため、B地区の機械搬入、搬出等にはA地区内を通らねばならなかった。以上のことからA地区では、調査区の東側に幅4mの仮設進入路を設置し、2・4区より発掘調査を開始した。2・4区の調査は、進入路部分を残し、3区に掘削土の仮置をしながら行った。

仮設進入路部分の掘削については、B地区の進行状況を見ながら、調査の最終段階で掘削を行った。調査終了後、空撮を行い埋め戻しを行った。3区の調査は掘削土を2・4区に振り分けて仮置しながら行った。なお2・3・4区内の遺構については大阪府教育委員会・岸和田土木・当協会とが協議した結果、遺構保存のために砂養生を実施した。(田中龍)

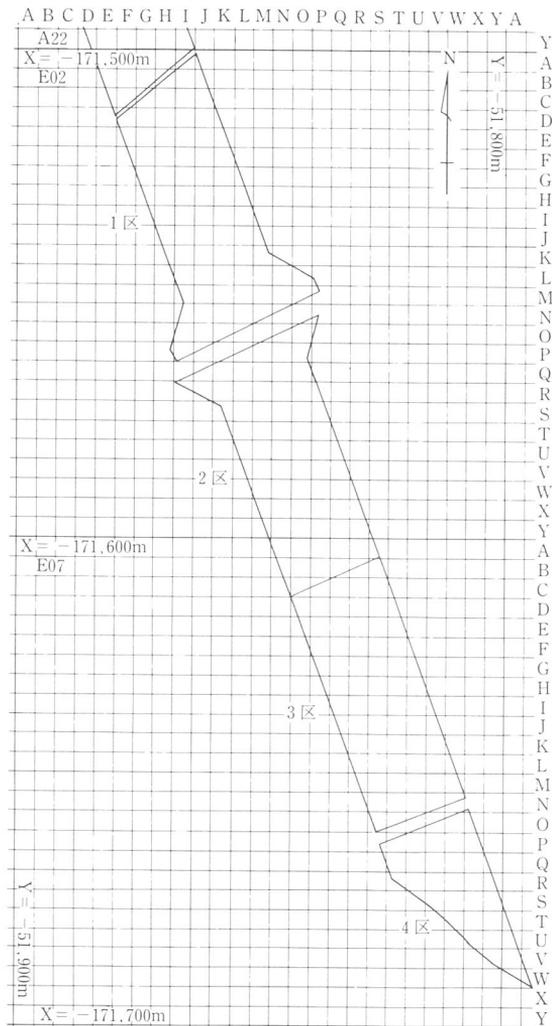
### 第2項 B地区

今回の調査で解明すべき問題については事前に担当者間で討議を行った。その結果以下にあげる4点の課題が設定された。

1. 三田遺跡北側で実施した第1次調査によって明らかとなった、小古墳の広がりを確認すること。
2. 古墳周辺で同時代集落の有無を明らかにすること。
3. 分布調査の所見をもとに、鎌倉～室町時代の集落ないし寺院の確認を行うこと。
4. 現在の耕地と、そこに見られる地割りの上限を把握すること。

これらの問題を明らかにすることに目的を置いて、調査方法も考慮した。

この地区は、藤池の北側部分に相当する。調査区は、南北の総延長約175m、幅約18.5mである。道路及び里道が調査区を横断してい



第9図 B地区地区割図 (1/1,500)

るため、便宜的に北から1～4区の小調査区に分割して調査を実施した(第9図)。ただし調査区の基本的な地区割りについては、本章第2節で述べた当協会のものを使用している。各区の長さは、1区約55m、2区約47m、3区約53m、4区約20mである。

調査区内に排土置場を確保する関係から、北側の1、2区より調査を開始した。3、4区については、1、2区の調査が終了してから反転して実施した。

表土層(耕土・床土層)は、機械によって除去し、それ以下の各包含層については人力による分層発掘調査を行った。

事前の分布調査によって、古墳時代、鎌倉～室町時代、江戸時代に属する遺物が採集されていた。前述したように鎌倉～室町時代と古墳時代については、遺構の存在が予測されるため、各層での遺構検出を試みた。

1区から3区にかけて、主に鎌倉～室町時代包含層上面と古墳時代包含層上面で耕作に伴う小溝、溝、畦畔等が多数検出された。

前者に関しては、1、2区で遺構の完掘を実施したが、3区では時間的な制約から、畝等の唐鋤痕跡と思われる多数の小溝については、その方向を現在のものと比較する意味で部分的に遺構検出を行った。この部分では、遺構掘削せずに遺構検出段階で写真、図等の記録を作成している。

また後者については、3区のみで小溝が明確に認められた。ここでも、時間的な制約から、その方向と範囲を明らかにすべく、調査区の北側半分について遺構検出を実施した。畦畔に伴う溝等については完掘を行ったが、小溝は遺構検出のみで留めた。その他に古墳時代包含層上面では、1区南半部から掘立柱建物3棟といわゆる「中世素掘溝」、土坑等の遺構が認められた。2区では、土坑と調査区を横断する溝が数条検出されている。

以上の所見によって、最初に提起した3番目と4番目の問題については、一定程度の成果をあげることができた。

古墳時代の遺構は、主に黄褐色シルトで構成される地山層上面で検出されたが、2区の南半部においては、2枚の遺構検出面が存在した。2区の下層遺構については、大阪府教育委員会と協議して、上層から見つかった大形掘立柱建物を遺構保存するために、一部をトレンチで掘り下げるだけの調査に留めた。

この時期は、調査区のほとんどの範囲から多数の遺構が確認された。特に1区南側と2区から3区にかけては、掘立柱建物、竪穴住居等の遺構が密集して見ついている。これらの発見によって、当初に抱いた2番目の課題についても、ある程度の回答を得ることが

できた。

今回の調査では、最終面の遺構全体図（1/20,1/100）を航空測量によって作成した。ただし、3区の竪穴住居群については、時間的な制約から完掘前（セクションベルト及び床面の精査を残した状態）に航空測量を実施し、完掘後に作成した詳細図等の記録を全体図に合成する手順を取った。

特に古墳時代後期の遺構は、遺物を伴ったものが多く、切り合い関係もかなり錯綜していた。そこで掘削にあたっては、遺構と遺物の関係を捉えることに注意し、遺構埋土、遺物出土状態等の詳細図を可能な限り作成するよう努めた。この時期の遺構番号については、初め通して付していたが、途中から1区が100番代、2区が200番代の番号を用いたために欠番が生じた。

第1次調査において、サヌカイト製の有茎尖頭器、石鏃、削器、剥片が比較的多く出土しており、B地区でも、包含層及び3区の竪穴住居埋土からサヌカイト剥片が数点見つかった。そこで、この時期の包含層の有無を確認すべく、遺構の少ない1区の北側と東側、2区の北側にそれぞれ幅約2mのトレンチを設定した。段丘礫層まで掘り下げたが、石器、剥片等の遺物を確認することはできなかった。

保存協議の結果、古墳時代後期の遺構については、ほとんどが遺構保存されることになり、建物跡などの集落部分は砂によって被覆した。（渡辺）

### 第3項 C地区

今回の調査は、第1次調査（1985年）によって提出された問題を念頭に置き、以下に述べる課題を設定し、行った。

1. 第1次調査で検出された古墳時代前期の土壌群の性格、その拡がりを明らかにすること。
  2. 第1次調査で明らかとなった奈良～平安時代集落の拡がりとその変遷。
  3. 鎌倉～室町時代の集落の有無を明らかにすること。
  4. 方向を異にする小溝の時期及び地割りとの関係。そして、その上限を把握すること。
- これらの課題を踏まえたうえで調査方法の検討を行い、調査に望んだ。

当調査区は、想定される三田遺跡の北側部分に相当する。調査区は、南北の総延長約380m、幅約14mである。なお、1区および2区の北側40mは擁壁部分をも含んでいるため、幅20mをはかる。

今回の調査区は、本協会の定めた地区割で表示すると、大D-4-10-L-24・L25、大D

ー4ー6ーDー04・D05・D10、大Dー4ー7ーA06・A11の100m区画内に位置する（第1図）。遺構名の表示方法については前に掲げているので省略する。

ところで、調査区は横断する道路、里道によって4箇所に分断され、調査による排土を場内で仮置きする必要上からも、6つの地区に分け、便宜的に北から1、…6区とした。

実際の調査は、その進行に合わせて5・6区、1・4区、2・3区と3回に分けて行った。それぞれの小区をCー1区、…Cー6区と呼称している。なお、1区と2区は里道によって、3区と4区および5区と6区は道路によって区切られる。2区と3区および4区と5区は反転して調査する関係から、道路中央杭のNo279+10m、No288のところまで二分した。

I層（耕土・床土層）は機械力によって排土し、II層以下の掘削は人力で行っている。I次調査の際、III層（中世包含層）が耕作面の累積の結果、形成された土層であることが明らかであったため、面的に分層発掘をこころみた。ただし、時間的な制約からすべての地区にわたって調査することは断念した。

比較的良好に中世包含層が残存する5、6区についてのみ、面毎に遺構の完掘を実施した。その結果、耕作に伴う小溝・溝・畦畔等の遺構を確認した。1～4区については、中世包含層を分層して掘削し、層ごとに遺物の取りあげを行い、含まれる遺物の変化をみ、形成時期の把握をこころみた。

奈良～平安時代の建物跡は2、3区において、一定の拡がりをもって検出された。これらは、保存されることが明らかなので、面的な拡がりを確認することを目的とし、調査は最小限におさえた。土坑、溝は完掘したが、建物跡を構成する柱穴は半截するに止めている。この時期の建物の遺構番号は2000番とし、北からC2001ーOB、…C2016ーOBと呼称している。

古墳時代の遺構は、調査区全域において確認している。4・5区では古墳時代前期の土壇・溝等を検出した。土壇は第1次調査では土壇墓と理解されているので慎重に調査した。人骨等は検出されなかったが、完形の土器の出土をみた土壇が数基あった。念のため脂肪酸分析をするために土壌サンプルを採集している。分析中。

先土器時代については、調査終了後に試掘坑をもうけ、調査したが遺物を検出することが出来なかった。

最終面の遺構図は航空測量によって縮尺1/20、1/100を作成した。（宮崎）

#### 第4項 D地区

B-2区、B-3区の両側部分について、道路擁壁工事が未調査部分にかかるために幅1.0～1.5m、両側合わせて約200mの範囲で発掘調査を実施した。西側を1区、東側を2区と仮称した。

地区割りについては、B地区同様に本章第2節で触れた当協会のものを使用した。掘削は、表土層（耕土・床土層）を機械によって除去し、それ以下の古墳時代～江戸時代にかけての包含層については、全て人力による分層発掘調査を行った。

基本的に層序はB地区と同一であり、耕土・床土層の下に江戸時代包含層、鎌倉～室町時代包含層、古墳時代包含層、地山層の順で堆積している。鎌倉～室町時代包含層、古墳時代包含層は、南半部（B-3区）で薄くなり、地山層が南へ行くほど上ってくる。

調査では、基本的に鎌倉～室町時代包含層の上面と、古墳時代包含層の上面、及び地山層の上面でそれぞれ遺構検出を行った。前の2面については、耕作に伴う小溝、溝のみが確認されている。古墳時代に属する遺構は、大阪府教育委員会と協議のうえ、道路擁壁の基礎にかかる2区の北側約20mについてのみ完掘した。他の範囲については遺構保存がなされるため、一部を除いて遺構の輪郭だけを確認する調査に留めた。

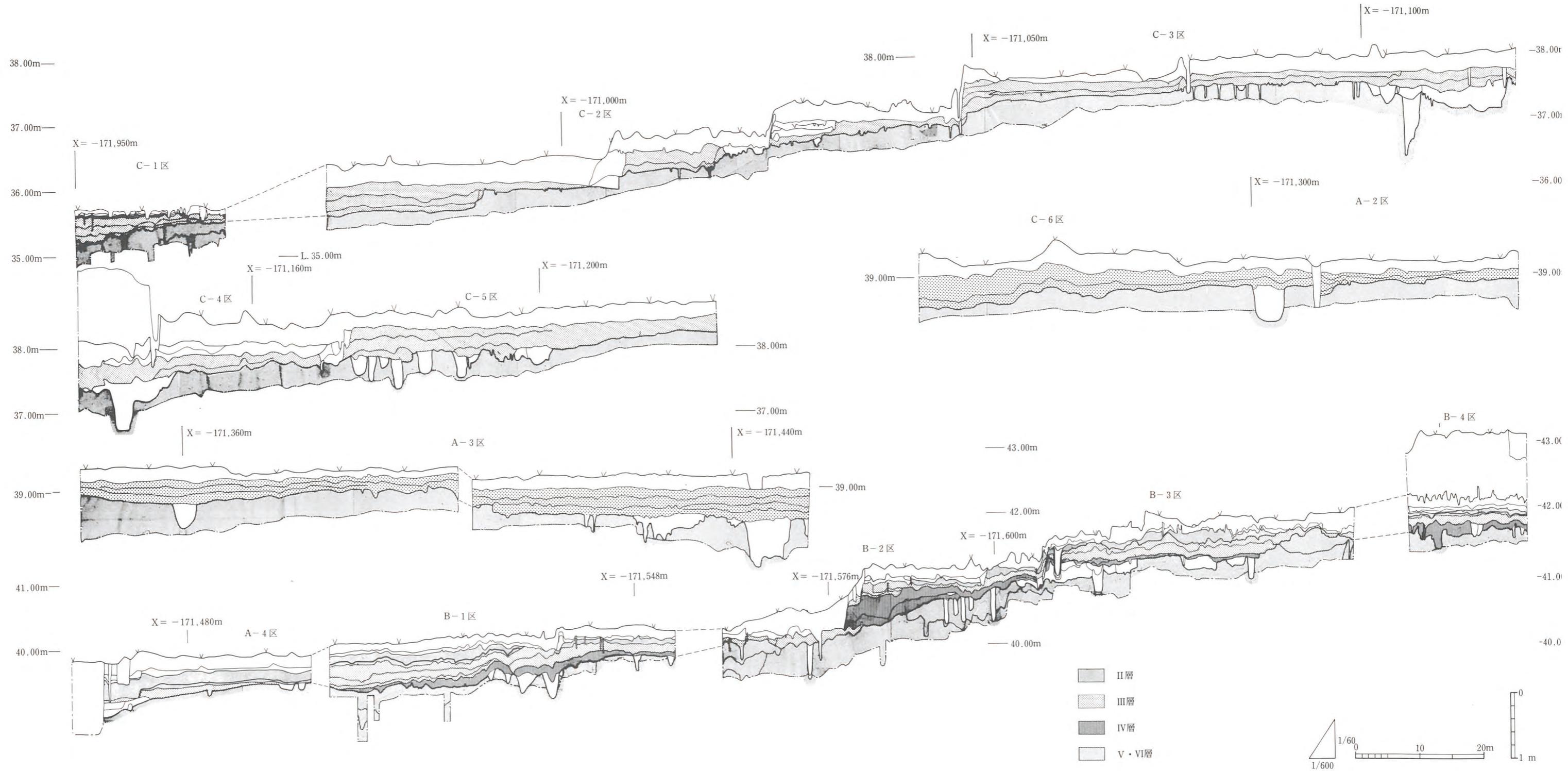
調査の成果については、B地区で合わせて報告している。

(渡辺)

## 第IV章 層序

調査区全域に係る基本層序を記述する。詳細な層序は各調査区にゆずる。

- I層 現代耕土。
- II層 近世～近代の耕土。B地区では遺存状態が良好だが、A・C地区では部分的にしか確認されていない。C地区では、耕土の他に耕作面の拡大（整地層）および畦畔修復時の盛土として存在する。
- III層 中世期。耕作面の累積と理解されるが、耕作面が確認されず中世包含層と概括している調査区もある。大きくIII A・III B・III Cに分離できる。III A・III B層は調査区全域に広がるが、III C層はC地区に限定される。III A層は黄灰色を基調とする混砂土で、C-6区では4枚の耕作面が確認されている。III B層は灰色を基調とする粘質土で、C地区ではV層上面に踏み込み跡として残存することから水田耕作土の可能性が指摘できる。III B層は黄灰褐色を基調とする粘質土で、C-3・5・6区に拡がりを示す。試掘時には古墳時代前期の包含層として取り扱ったが、今回の調査で瓦器や黒色土器等の時期の下降する資料が含まれることが判明したので、ここに訂正しておく。遺物には、先石器時代から室町時代までの資料がある。その内訳は、下層遺構の時期・種類の差を反映し各調査区により異なる。A・B区では古墳時代の遺物が多い傾向にあり、C区では奈良時代から平安時代にかけての遺物が多い傾向にある。
- IV層 古墳時代後期。B地区に限定される。  
性格は当該期の整地層で、上面では古墳時代後期と中世期の遺構が検出されている。
- V層 調査区により混入する礫の頻度や土色に差がみられるが、基本的に黄色を呈する粘質土である。洪積段丘礫層の呈する起伏の凹地に堆積したもので、調査区の全域に分布する。この層にはサヌカイトを材とする石器や剥片が包含されるが、これらの資料に係る遺構等は未検出である。この層の上面は、各調査区の最終遺構検出面にあたり、古墳時代前期・後期、奈良時代～平安時代、中世、近世、近代の各種遺構が検出されている。
- VI層 洪積段丘。 (小山田)



第10図 三田遺跡縦断(東壁)土層断面図(垂直1/60・水平1/600)

## 第V章 A地区の調査

### 第1節 層序と概要

三田遺跡にかかる磯之上山直線の路線は約700mに達する。そのうちA地区は中央部の約240mである。調査区は路線を横断する道路により3分され、調査進行の便宜上2～4区と呼称した(第11図)。なお、擁壁工事の都合により1区も同時に調査したが、A・C両地区の境界から約40m C地区にはいりこんだ地点の約3×20mの小部分であり、第VII章C地区の調査の項にのせるのが適当と考え、本章では扱わない。

三田遺跡の基本層序は第1次調査の成果により第I～V層に分けられている<sup>(註1)</sup>。A地区においては第I・III・V層があり、第II・IV層は存在しない。

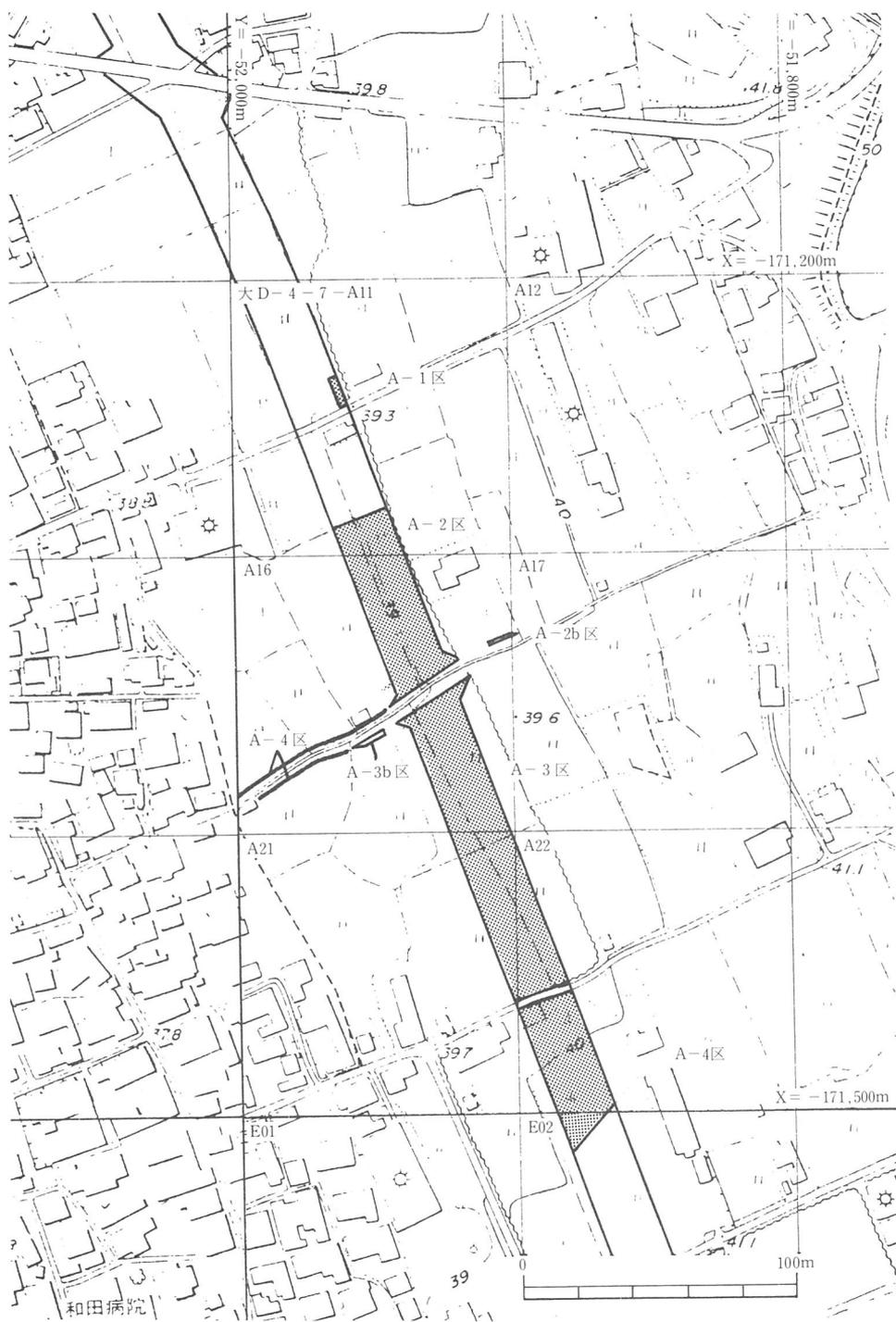
第I層は現代の耕土であり、厚さ20～30cmである。標高は4区が最も高く約40mである。2区・3区はあまり変わらず、39.2～3mを測る。

第III層は中世の包含層である。数層に細分可能であるが、上部は灰黄色系の細礫混りの土層、下部は灰色の細礫を混える粘土層で、下へ行くほど色調は暗く土質は粘性を増す。遺物は13～14Cを中心とする中世期のものが多いが古墳時代のものもかなりある。下位に行くほど古墳時代のものが増加する傾向はあるが、古墳時代遺構面直上まで中世の遺物が含まれている。

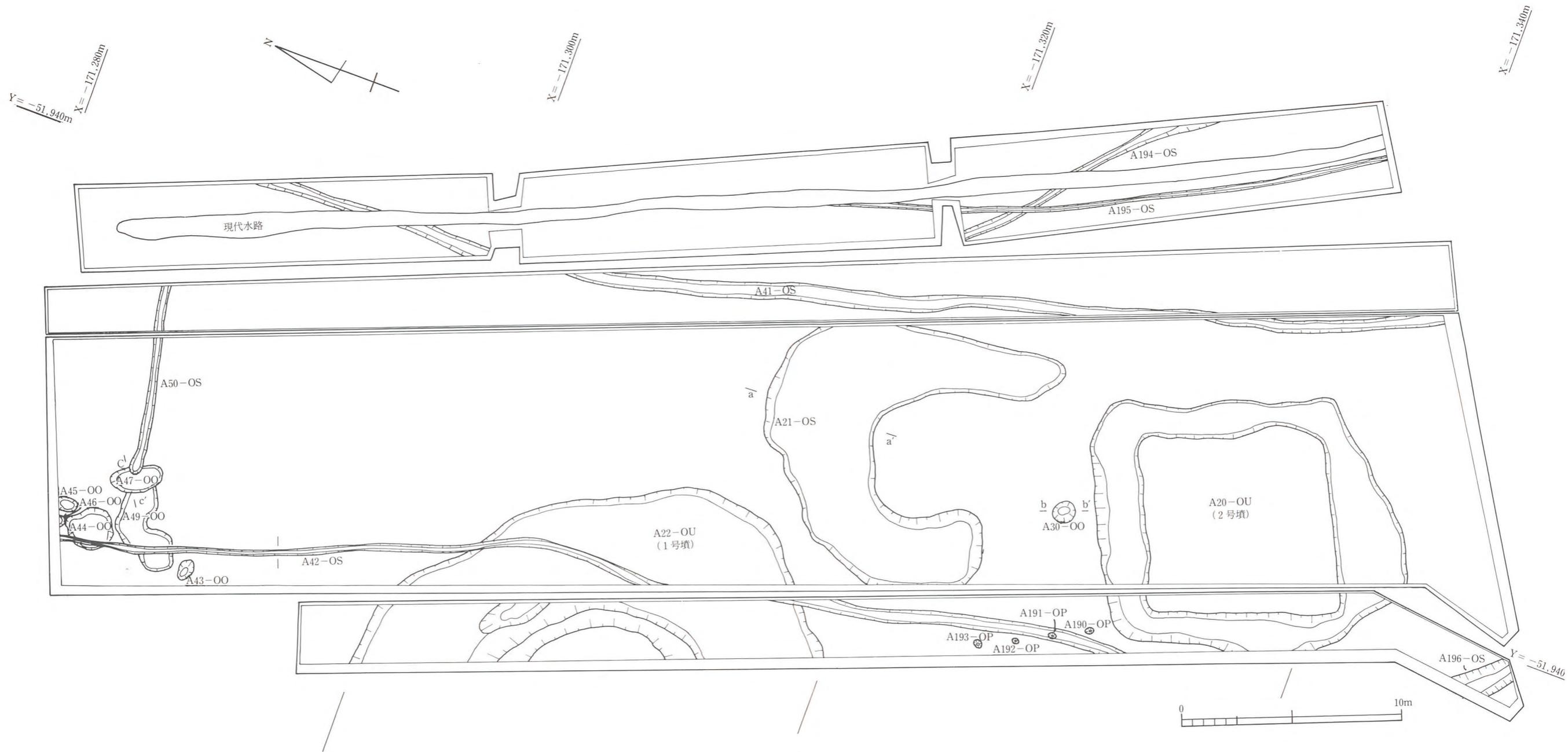
第V層は黄色粘土層で風化した砂岩礫を含む。この層の上面が唯一の遺構面であり、古墳時代・中世の遺構がある。A16VW・VX・XW・XXでは層中にサヌカイト石器、剥片が含まれている。この層の下は黄色礫層である。

この遺構面で検出した遺構はほとんどが古墳時代のもので、一部中世に属するものがある。古墳時代の遺構は大部分が6世紀代のものであるが、3区から4区にかけて検出したA168-OSからは布留式土器が出土し、5世紀代に属することが知られる。

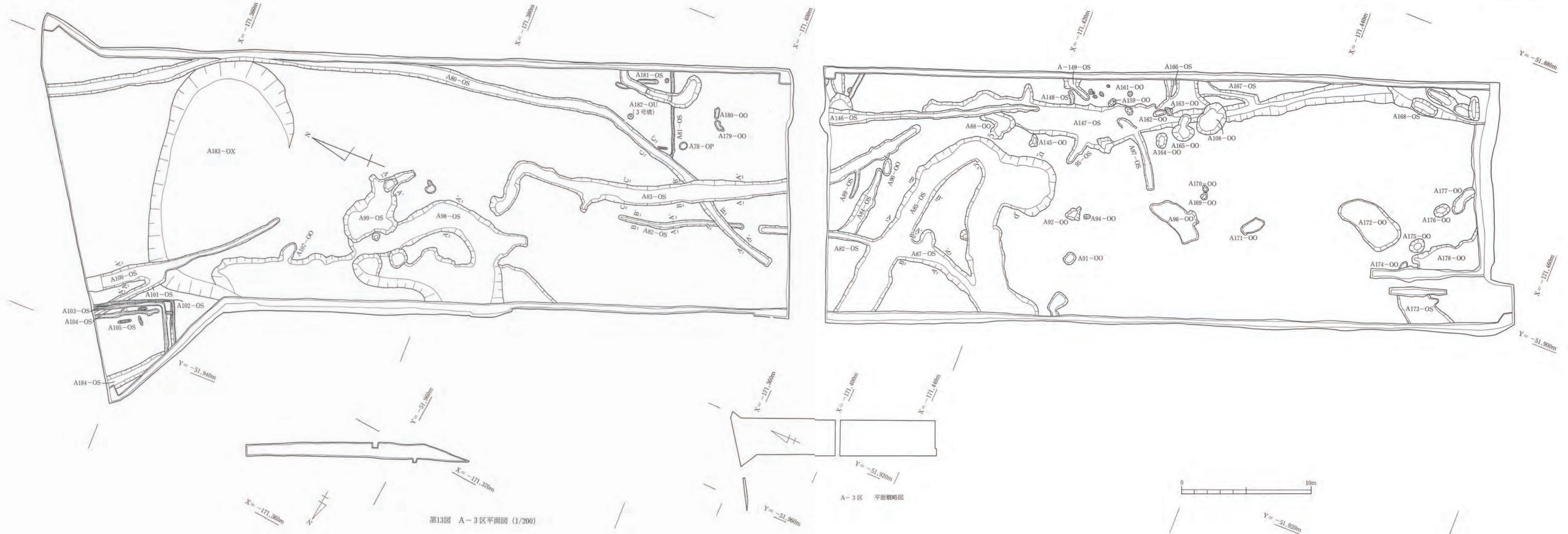
6世紀代の遺構として古墳、土坑、溝等がある。古墳はA地区のなかでは北半にあり、2区に2基、3区に1基がある。これらは第1次調査の際検出されていたものであるが、今回はより広い部分を調査した。これらの古墳の立地と地山面の起伏の関係を観察すると、やはり地形の高い部分を選んで築造していることがわかる。1号墳と2号墳との間に半円形の溝があり、第1回泉州の遺跡展の際4号墳と命名されているが、古墳とするには疑問<sup>(註2)</sup>



第11図 三田遺跡A地区割図 (1/2,500)

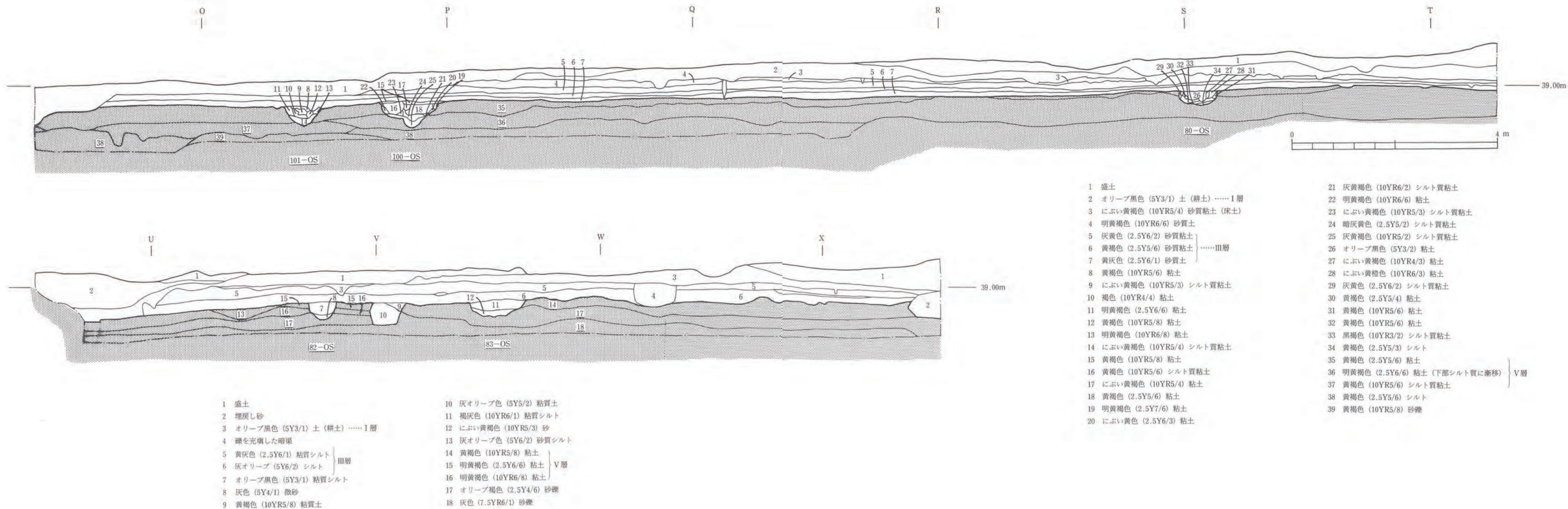


第12図 A-2区平面図 (1/200)



第13図 A-3区平面図 (1/200)

A-3区 平面概略図



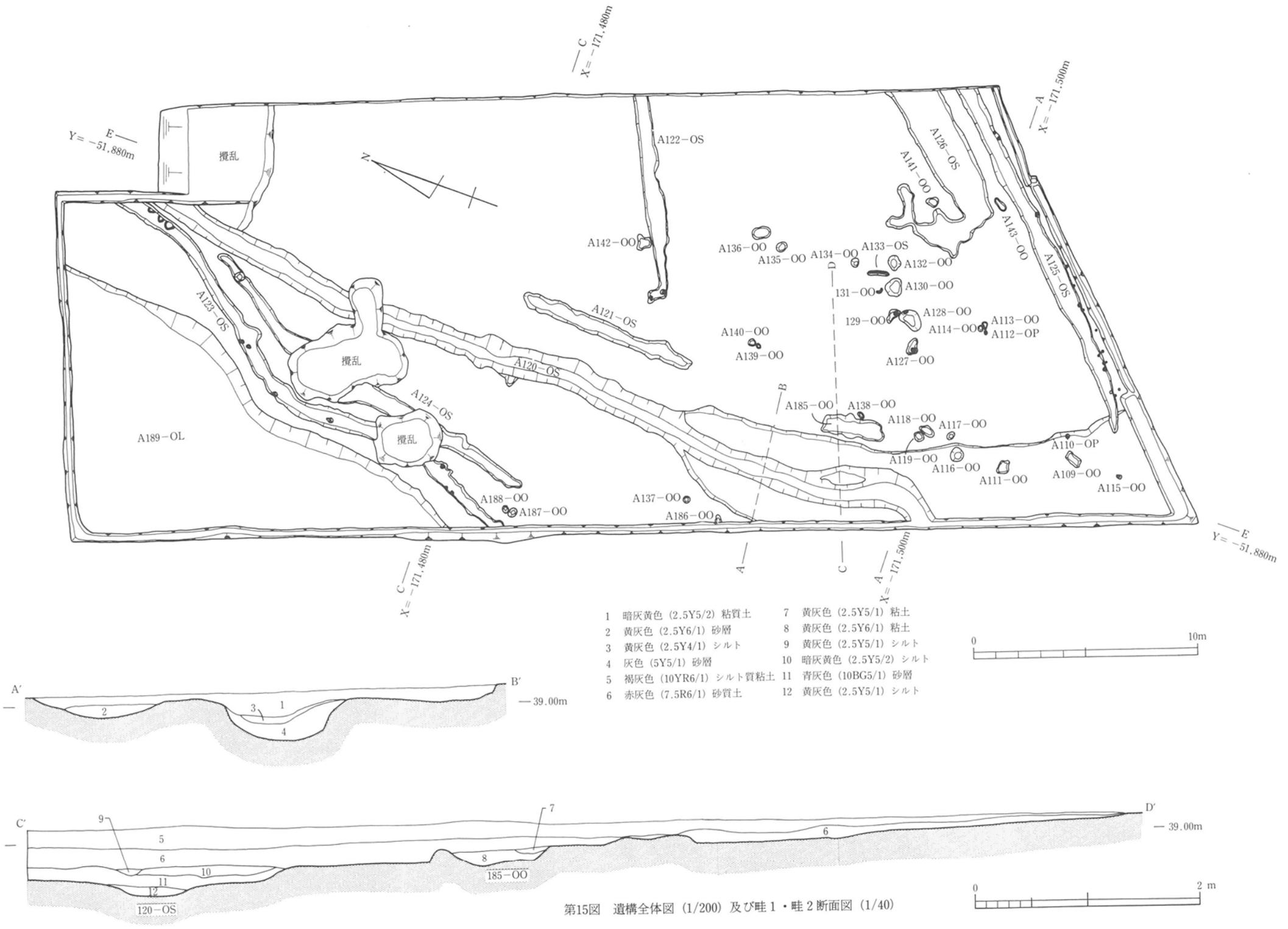
- 1 盛土
- 2 埋戻し砂
- 3 オリーブ黒色 (5Y3/1) 土 (耕土) …… I層
- 4 礫を充填した暗渠
- 5 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質シルト
- 6 灰オリーブ (5Y6/2) シルト
- 7 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘質シルト
- 8 灰色 (5Y4/1) 微砂
- 9 黄褐色 (10YR5/8) 粘質土

- 10 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土
- 11 褐色 (10YR6/1) 粘質シルト
- 12 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂
- 13 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂質シルト
- 14 黄褐色 (10YR5/8) 粘土
- 15 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土
- 16 明黄褐色 (10YR6/8) 粘土
- 17 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂礫
- 18 灰色 (7.5YR6/1) 砂礫

- 1 盛土
- 2 オリーブ黒色 (5Y3/1) 土 (耕土) …… I層
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質粘土 (床土)
- 4 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土
- 5 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質粘土
- 6 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質粘土
- 7 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土
- 8 黄褐色 (10YR5/6) 粘土
- 9 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土
- 10 褐色 (10YR4/4) 粘土
- 11 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土
- 12 黄褐色 (10YR5/8) 粘土
- 13 明黄褐色 (10YR6/8) 粘土
- 14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト質粘土
- 15 黄褐色 (10YR5/8) 粘土
- 16 黄褐色 (10YR5/6) シルト質粘土
- 17 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土
- 18 黄褐色 (2.5Y5/6) 粘土
- 19 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土
- 20 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土

- 21 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質粘土
- 22 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土
- 23 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土
- 24 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土
- 25 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質粘土
- 26 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘土
- 27 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土
- 28 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土
- 29 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト質粘土
- 30 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土
- 31 黄褐色 (10YR5/6) 粘土
- 32 黄褐色 (10YR5/6) 粘土
- 33 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
- 34 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 35 黄褐色 (2.5Y5/6) 粘土
- 36 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土 (下部シルト質に漸移)
- 37 黄褐色 (10YR5/6) シルト質粘土
- 38 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト
- 39 黄褐色 (10YR5/8) 砂礫

第14図 A-3区北壁・中央部横断面図 (1/40)



第15図 遺構全体図 (1/200) 及び畦1・畦2断面図 (1/40)